風俗文選犬註解

叁

宮内省図書寮印

風俗文選大註解 巻之叁

江都 薩摩守 分我著

去来

鼠ノ賦 并引

此賦以ニ五音相通ノ假名字一為レ韻

鼠一つの形ハよの色ゝ居又よめゝよめり其いゝ称品あり四尺の鼠ゝ圖ゝ
にしてたるゝハ又ちすちいさきハすゝまゝて山椒の眼小豆の鼻歯ゝ糸をつ
けて小袖ゝぬゝふゝく耳ゝ木の芽のめゝつゝ似ゝ尾をきゝつて錐のさゝやゝとなのさ
はゝのてん脊脇の色ゝめゝくゝすゝくゝこゝくめ深おせゝ其行やおゝて昼隠る
常よゝすみとゝて身を養ふ体ゝにくむ〈きゝめゝ一つなゝ乃賦を作りて曰

山の井ゝ都て正月ハ世のつゝまゝかゝるゝのゝゝ多き称すゝを嫁ゝ居ゝ
よゝゝ三ヶ日のゝ嫁ゝ居ゝゝゝるゝゝ

明るゝ初ゝのゝゝに心ゝ嫁ゝ居　其角

光陰通行　書　其角

妻戸を明て出るゝ昼ゝ人目ゝかゝゝ里あゝめゝゝとかゝゝ

扇の要よりむすぶおもひぞ葛の葉のうらみかはせし二見形伊勢物
語の花なきやうなるかや小車の我からものに狂ふとはかの祐成が恋の山
つま其扨は宝しまる時月海上ようかれ女の泪よくめるむら雲と雨を
起して鳴神もいかて命をさけてましし巳の日の夜中ふしての誓(チカヒ)をうけむ加
茂川やはく瀬よつけて足をふへうれ色ってスワトントンとおそいは志よくおす
うちりん杖の下よりも獣(ケモノ)となりし石もおろ久世の中のうきことをおもいは
ざることもまさるなれ又逢坂のせきもりも一扨は中やせとする鼻し百扨
とかくつかよひ路をせきかむる声は狭草の中をこれは狗子草(イヌエノコグサ)はえ出てし
ところくひさ苅藻(カルモ)の床とかや伏見の里よ鳴くる蟋蟀の心のうち
ち又こひしとはのくるまよで油地獄(チゴク)よつきぬる

鼠なる　やまそだち　まむ　多こなり　其角
引つれて　小松くはへる　ねつみかな　、
ねの鼠の　ききと　くちん　土筆　、
かくれけり　家や　ねつみ　引きぞん　、
松ならで　穴く　餅　引　ねつみかな　貞徳

鼠とる涅槃乃猫となりにけり　言水
顔出して鼠あつかる　扨宮の卯　百里
ぬけ出より中よ　鼠の　鳴扨け　貞佐
おほの魚手　ねつみの　髭の　そよぐむ　立志
としよりは　鼠も引は　宮の車　その女
逢坂の　夢よ　かよふ　鼠の子　西雀
妹がくれ　鼠の足か　さよちどり　其角
松川と　あつきの　里つ　鼠の卯　正忠

二月鼠の穴をふさぐ。いくついくつをおもへる居て人をおそるゝは
足のうらの疵(キツ)ねけりし㊂油をとのむる世の酒よひとしられとやしか沈酔(チンスイ)をえんも㊂
栗をつくし笑をそこなふ様子よいかど㊁大棗(タイソウ)とかむ牙(キバ)よふるれは土柿を生じ㊅
まつしき身をちらして男女の中をさまたけ㋭あやしき業を作りて源平の乱をまく㋣
あやしき業をつくりて　源平盛衰記十六
入道の世の末なりて家のさかへのさとしあやしき坪の内よひそくして立
飼たるる尾よ鼠の巣をつくりて子をうみそだてふかするる中ヶ

占文のまれ所平家のめつぼの端相のつゝ八八道の堯を
平家都を安堵すべきいとなるを小の方之る八南なり鼠のる
まきくるのるるをそるまきる鼠を巣をつくをそるをうまをせうま
てに下こく上せうされ八るの中の方ようるひすきとひ上りて千の南のるを
おいする平家の卿相を都の外を追ひ落すべき端おくこゝをられ
和名抄鼠穴居の小獸 類多きものなり
晉書に大康四年會稽の蠻蛨及蟹皆化して鼠となるとそう
仏をるつくひて僧人のさめしよりきれいにすえて書を焚代の宰相となるめる
神佛のそるきを尿糞を汚し奉る 草の根をそむ月の鼠を傍成の根をそう
僧人を鼠をるつるろ天をそうる書を焚を秦の代天下の書を焚そう
我のむ世の根をそむ鼠をとおるへ八月のうらめきそう 後拾
みそうの京のをるさくの鼠きのをそるるるを祝るよ
つくく世のあるきをおめく夫人のかるときや万木蘭をまきく吹矢をまるけ
糯をめるて往来をるをそうる けいき城をそのむるを鼬をふせく殿をあるど
鼓のる穴をるるるて巻のつるむ愁るるつるる 術をる障るのるり早業る

るる顔るるをおのるる仏神をかるていう年のるひを千るん 虚死して仕合る東坡の
袋を逃るるを生捕をるまるるに張湯る文をるけるん 或る鈴を頸るさけるる
児童のをるるるるる或る年の用る鼠をぬるて老の梅を殺せる あやまるて
盗鼠とあるつれぬる鼠と笑いをさるる吹矢るくるーみて人のるをそるるこれ
めるる 多さかるきを焼鼠とるるて狐狸の命とるむるて鼠ふるれ
東坡る袋八東坡るをるるめる彩袋を童るる持る画をるるるるを八
るるるいひめるるに一疋人生のるるるきるを鼠の上るかきるるて文とるを
り生捕と八生るるる敢をつふ捕るるるて殺の意るる八生捕るるるり
形の鼠を敢るるを敢猫の鼠をるる城をるるむをるる皆殺るの意るり

紫氷巻二 張湯巧詐

張湯兒の時父の留生る肉を鼠る
とられ文湯るを湯をむちるつ湯鼠の穴をるすぐられをるるるの
つるの沈をかきるるる鼠をるるるつけるるるる
つるる世るるるをおるるるるるるるるるて信いやるる 百姓のかるるる
甲るを返て年の號あるるめるるる 正の春立かれ八るのるの正賀あり
初るの日 小松引 るの日の松 公事 根元る

むかしくこゝに迄出てみのるすとそゝ小杉をかりる也朱雀院圓融院三
条院なとの時は此杉ひろあるる也中ごろ院のみの日まゐりのひる
八寛平二年二月十二日のゐん御ゆは車なりしの紫地近くなりて上皇ら
出るまめまれなる左右の大臣以下皆直衣なりて反上人ら布衣なり幄の座をまうけ
け慢をいめりし小座なとして小杉をひと枝らふり給物おひの榜破る
やのものを奉るくく和歌を献じ其附の序者ら平の兼盛なり
子祭といふいつれの長者の傳へなる かゝの日本の歌なるよあり 海東やまの後
のかけよ友ふるまこら海嵐とかも 秋風の尾花の末よ書をふ 歌八四嵐ら
化しくる也爲時玉のくきおいいつちとなるかう 象といふる獸すかつ恐懼ゆる
麝香嵐をつくくる任なれてことゐよ行ひ かつぎ姿のあやうるハ婚入の後て
らとまそ どこのしるを七郎とハ中ひ 狩高とハさうやきすての後るて
大祓ゝ小祓ゝ 時さ井日嵐と者のり月くるよ十二のみをゝむ 誰ら家ゝうゝ
つくゝ侯ん すゝ多る出て福の神よや先せらあん 海ゝかゝ里いつくのゝゝまやむさし
此の嵐宛よや出雲の境の嵐ゝせきるゝ 信濃の奥の嵐宿るゝ 目ある多とて
かゝるめのせをむきるゝ ゝとゝ侯んるをあていざる 窮嵐かゝて猫をかむ志あるゝ

三井の頼豪ゝ千足のいきゐひすゝ女高を逐るゝハ桂きゝ人さゝゝ
子祭十一月 まゝ 田嵐化して鶯ゝる春
嵐のかゝ皇ハ迷異記ま嵐ゝとあり嵐の嫁入ら寛永の比の後ゝ
帝ゝあゝて人ゝ見女のもてあそひる其後あり
福の神よや先せん ちるの記傳
御祖ノ今下大宛年遅ノ神よのゝたまゝく須佐能男命のまゝ根ノ堅
剛のゐゝまゐてよかゝゝ其大神ゝゝゝひなんとのゝゝかん
みゝゝのまゝ〳〵須佐能男命のみゝとたまゝゝゝ其ゝむすめ
須勢理毘賣 生ゝてまゝく〳〵ひてみあひまゝて かゝゝ入て其出又
にいゝゝゝゝき神まゐきゝとまゝゝゝひきかゝ其大神ゝてゝて
こハ葦原色許男といふ神ゝとのゝゝひてやゝそよひのて其蛇ゝ
室屋ゝ移ゝめゝまひき其出書すゝり源の人命蛇の比礼を其ひこぢ
ゝさゝつけそのゝゝまゝく其蛇くんとせハ比礼を三度ふりてお拂
ひゝまゝとのゝゝまゝふかんをゝ蛇おのゝゝゝゝのこゝゝゝゝ
ゝ故ゝやすく移ていゝゝゝゝまゐゝのあハむかての室

[illegible]をむかで嶺の北礼をさつけてさきの鉦をしへのひゝ
[illegible]やすく[illegible]きまし吟鍋を左手に中にいきて其矢
をくしのゆふかれ其つゆよへまるかはよりなして其つをやき
めくしつくよいてんををさまる間に嵐来ていたる八内八ゆるく
外らすぶくかくつゆゆるをそこをふゝ八蔵入りかゝるゆる火を
やけるぬるに其行つみかのるかゆらをくひくちいてきて
てゆつるき其矢の羽をの嵐のるゆる[illegible]
三井の頼豪ゆる足の勢ひ

白河院皇子まゝ沢三井寺乃寛相房頼豪あゝるゆ作
さて皇子誕生のいのりあるゝ八賞八をるよりと勅約ゆ
かゝて皇子みゆ出産ましくれ八頼豪よ賞をのそむ〳〵きゝ勅
定ありゆ三井寺ゆ戒壇を建ゝきよゝ出つれゆ山門乃
義をくちて勅許ゆりれ八頼豪ゆんぬゝて山門あれ八ゝを
あれ意ゆ叶ゆ行て飲食をゝめて乃場ゆ入て行ひ死ゝ祈り
出ゝまゝし皇子をゝゝ悪霊敵ゆの嵐とゆて山門の聖教を

えやゆれこれ八頼豪ゆ怨霊ゆりとて上下ゆかゝとて御ゆゝ乃
りしゆゆ嵐ゆ生来てをひくゝ[illegible]ゆ[illegible]ゆ
悪霊をゆゝ[illegible]ゝ乃ゆのゆゝをつゝて[illegible]ゆる嵐ゆ
ゝつゝゝる

みゆや月の嵐乃完ゝ　止亭
年一おゝゝ[illegible]ゝ日の嵐　嵐雪
寄大王嵐
亭の影ゆのゝ[illegible]白嵐　琴風
外の花ゆ傳ゝあゝゝ[illegible]嵐　訓行
橘と花と[illegible]ゆ嵐乃巣　義
花ゆ[illegible]
[illegible]ゝ巣の移つを
[illegible]ゝ代ゝ乃乃四の嵐　氷花
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　許亡

西寺のまへの老鼠若鼠もんもつんつけさつんつけさつんつかりしに
やせ師にやせ法師にやせん師にやせ
毛詩曰 人之無禮亦如レ鼠 不レ如二速死一
花つゝ集にのせたる鼠の説に同し作者にしてしるしたる
よりハくハしくて文意明らかなれハ全文をあぐ
鼠くらきに出て行にかゝる家に居て人を忘るゝハ足のうらに疵
おけらし山椒の眼小豆の鼻歯に糸をつけて小袖を縫るへく
耳に本の葉のめくりつるに似たり地黄をくらへるも白く大栗をかむ
口毒あり尾切て錐のさやとなるへしハなすてん皆腹の色をあめて
うすくるとこにくにに深出せり彼こなりける染の名やそなるに嫁入乃
絡そらるゝかるん等の用に髭をぬかるゝハ老ての後の海かかんハせ
のくらつまからハ盃鼠なれハなるへしつくりし内芽のつくつるをおす
へハ油を呑み世の酒にひとしくれとも酔ふりをもれハ雲をを
つくし墨をかなるハ猪子にくるしかりし貪僧の筆につくさを持あハ
まかする恥しむ文をちらして男女の中をさかなるけあやしき筆を

つくりて源平の乱となりぬ行を論てつ傳人のうらめしき行ハいつにはじめ
てか書をやく世の軍桐となりけん神佛の貴きを疏かり書をけすて
地獄落しのくるしみ為て志かるるや月日の鼠といふなるそをやくむのかく
らすんつくしく此身の貴きをおもへハ牛に形ちかく鼠に心猛りなれとも
下坐にたり百家のかしらむかし甲子を迎へて年の男を役の上春なれ
かへるねひの子の日の賀あり子祭とやハいつの時よりやりけん唐の大
和の歌もなれハ海魚やりつのかけにすむ海鼠秋風の尾花に来の
鳴く人我邦の人に野鼠と傳へ佳しき麝香鼠に志らぬ火のつくより
名に行ハ天井鼠に雷となりとこの乙名を七郎と八中染宿とを茄子ハ
月代剃てのするするやし大猫に小猫に廿日鼠月にして十二の子をうみ謝しく
廿の扇の音耳誰の家にとりつくしほんに白鼠来りて福の神のつかひ
ちんもぜれハつくしく鳴かなあやうきをおもへハけつしき城をくるんてこなる
よき鼬を夫せく隷にあるしきるを見て増くもまつ小為になれんとすむ
空くにおちくれてあさあさき姿をや番木をとるめ吹矢にあくるともつく
くるものハあるしど吹鼠めハ鼠とりにおちにまづ尾鼠或に鈴を頭にかけ

辛ふして或る里に隠れ文母にさへ見捨られん西ちの老鼠をんとつんつけき
つんつ法師にゆさん師にゆせ友達迫にそやされてつよらなるやうら死し
て仕合と東坡が硯を述ふんとなまじゐに張湯が文を吟我さへ恥しきを
狐狸の命をとらんとて焼鼠とならくるいと浅ましき姿そや拵へり障
子のやりの子葉ゆゑりとおもつ縁にかけて長き別となりぬ其書といひ
思ひひ汁の御もひをつすへん北南のかくれ里はいつれのあたりとてむさし
に鼠穴大比叡のかこちなるかうとらぬ頼豪が勢ひも本意を
けかし猫をはむ事くる不善なるく八歳御し彼おそろしき睡士よ世
にお任せんと西ふらぬ浮世を

西 披梅を倦つるゝ雲の鼠とも　吉泉

いつをむかしの粽しびくつらく兼くて法師来にゆつへられハ桐鼠チ
とくあらかくく待るかとに一夜るるのけちさんことて　此集よ
かくつき待るなり

旅乃賦　并引

此賦李由か白塞ぎ八甲路記行として古文ありさるにならず　詩　六

風狂舟か旅の賦　并　小序

五拾年の行脚に一點の雑をかゝむらぬハ西上人[illegible]の上なり獲
氏八品の逆旅ハ皆不平の上乃流浪なり古人も是なるも此な
るものに風雅のさかひを出して万古の情を述ぶり我風雲の客
なるか二十四ある時ゝ不破清見か明月に鞍をあけ士峰の雲に
額をあふくる五夜なりむさし上野を過て碓井の雲にまよひ木曽
路の泉にふ入る六夜にゐふ東西南北に奔走するに合せて十一夜
なり水村山郭本の山のさすまひ前後左右ハその[illegible]
朝夕んとする道ハ甲斐の猿橋を過て上の諏訪にかゝり又もや木曽
の川音のかしさに枕をならんと灯下に先達の記行とひらきて旅の
和歌古戦場の由来をとゝめて旅行の袋によくめ足袋は[illegible]の破を補
ひ杖のふしをおろして枕の上にかけるり我むつましお旅よ別を行
末おもひつゝあく心なききなるりゆく旅よ時々の一声を序常子

ちる月展多名てやゝ帝ニせく人足ゟ匹に首途(カトテ)をすゝめ明れハ五日
六日武江の鎖を退

卯の花や　芦毛の駒乃　出ぬる哉

日く乃文章ハおさむる記行ニおゐて筆をとらむ程名所とこゝろくの自ま
おほくハ古事の集ニ出れハこれをもらし志ゝあれと旅の情のをかしきを
あつめ多く為ルに賦つゝ旅すゝ翁のすくさめニかきあつめ　芭蕉庵へ
送る今のつゐてよりれハ云師のかゝみニ一列ニこれを考るす

旅ゝ風雅の花風雅ハ過客の魂西行宗祇の見ぬもち皆誹諧の情なり
西行ゟるはハかゝくゝの賦又西行ゝ讃ニよろしくいへり
昔宗祇の播亡人申しとて山寄ニ立よりおもひにに小鍋ひとつありて
てするらよ連歌の点とる主鍋いつれゝ其のつゐであるへし

代ゝふるも　あさしくれのやとり哉　村上天皇御製
世ゝふるも　さらにしくれのやとり哉　後村上院御製
世にふるも　さらにしくれのやとり哉　宗祇
世にふるも　さらに宗祇のやとり哉　はせを

同し旅寝ニ行しハ則り人我ゝ哉　貞徳

宗祇の旅寝といふ句ハ宗祇法師と同し旅寝ニ寝たるといふてかとり
しるを芭蕉宗祇ゝ生涯旅にてをはれるを他のうらやみていふなるへし
我翁白川の田植哥をはじめ奥羽の名をめくり高館(タカタチ)の夏草に兵ともか夢を
なかしあつミ山の夕涼みハ吹浦を詠め佐渡ニ横たふ天の川ニ初秋の旅
をうつるまゝより蛤の二見を送りて七百三十余程を吟す曽良ゝ落髪(ラクハツ)の力量
を感(カン)して一鉢を分て涙をそゝくなる

奥の細道

黒かみ山ハ霞かゝりて雪いまた白し
剃捨て　くろかみ山に　ころもかへ　曽良

曽良ハ河合氏にして惣五郎といへり芭蕉の下葉に軒を並へて予か薪(シン)
水(スイ)の労を助く此度松島象潟(キサカタ)の詠めともにせん事をよろこひ且ハ羈(キ)
旅(リヨ)の難(ナン)をいたはらんと旅立暁髪を剃てすみ染にさまをかへ惣五を
改て宗悟とす依て黒髪山の句あり衣更の力ありてきこゆ
曽良ハ腹を病て伊勢の国長嶋といふ所ニゆかりあれハ先立て行く

ゆきゝてたふれ伏すとも　萩の原　曽良

とかきかきうけいるすがたいとゆかしくなつかしくて雙林の別て雲とまるかの如し

くろかみやちはやむすぶ　笠の露　芭

大坂の庫より八百京も伊勢より壽命幾人くるるとあるを如行あるに

一日芭蕉庵をたゝきて俳諸の新流をのぶるに附て旅十徳の画をかきて賛して伊

藤氏に与へ其風雅をこのむ俗談をあつめ狂賊五徳を究かしこ

奥の細道の草まくらの類多くあり

　　風流のはじめや奥の田植うた　芭

　　早苗とる手やむすべばたちまちうた

陸奥福島より山口村に壽門石あり土人の説に昔俗あり

壽の子の山に草庵をむすびて住り母あり家まづしくして世をわたるすべ

なかりしに狂俗の庵のみきりに石あり千種のかたちを石の面にうつして丹

青の筆をもつて深細布にうつす世説麈の綾服呉服の衣といふるが

如しそせの人こゝを聞て其代物を油にして母を養へ

るとよろこぶぬるとうり星霜をへて石水中よりうかびて綾の

紋をうせめるを者ども形をうつすに今に残りやうにこの山里の田ま

奇なる石の加をしるべ侍て石の面を麦の粉にて磨けばうきくもの

かけるえ侍るべいつの昔よりかんるはしるを人をまつひるけくもめて

春の時はいとれハ都鄙とまるまつ麦の粉をかとめて石を磨んと

すむる者すなはち里の賤耕田の荒をんるをかつみて石をしるい

ん為に三十人家の力者をおそせてたちまる池の中押倒しまるん山

のあやうおそるべきる城にやう子細水中に伏めるに其後自然千

水絶て其形地にうつて石の像よりかつきき水の流れ返りおもてらま

こゝに細布を深りるかるるるやいなや人をを疾病石をんいう

旅十徳の白八角阿全集の旅十徳の白とあるハ八角のるるを寫

八徳の白とて七白あり者は十徳の白とあるハ八角のるるを寫

かゝ四白と七白とをもつて後の四とまを徳

旅の奥まつ深みちや春衣　許六

やまくらやまず迷らの油あり　芭

酒買て旅寝しる玉まつり　芭

五月雨や きく野の大井川　芭蕉

秋や須磨ハ仲秋　松尾宗房

貝寄る風の音や秋の声　和歌の浦

行あや吉野の山の笠ゝ代

星合の中や後なん童田川

杉島や　雲の白地の長配

蜻蛉ゝ峠かゝる雄子の

八歌や　天の川立ゝる

万葉九

梅もさくらもやめちらはゝ桃張や昼をこめて

伝見日人の物ありきる跡ゝ京の産はゝ梅もさくらを

るもとゝ旅行しゝる孫の産を梅もいめり

旅人ゝもゝ思ゝ思ゝ　むすきをやゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ

俗以盗曰須利蓋麁行餐以為行旅之具若盛水物

窃盗去而麁乾餐之窃盗

早苗ゝ我色ゝ早き敷小　芭蕉

実ゝ麁ゝ　宗因

旅店のゝ女上戸ゝ書院床釵菱のすゝ火のゝ火燈やゝかけて

入湯梅かゝ明て居ゝ底ゝ小砌のゝ苔ゝ苔ゝ　宗因

八春秋をゝ根ゝ板ゝ八歳ゝすみゝ近ゝ天井襖ハ雨ゝ

つき鉄行燈ゝ紙ゝ障ゝ子の心ゝ焼ゝ銭賣草鞋賣ゝ

うすゝ紙ゝ桃をかゝ明ゝ心ゝ春入ゝ蛍ゝ出立ゝ

七ゝ夕ゝ　芭蕉

大ゝ石の寒ゝ寒ゝ　芭蕉

乃つゝ月の上をいゝ行ゝ秋ゝ月の明ゝ

合一供の鳴ゝ　芭蕉

を行ゝ　芭蕉

まゝ　芭蕉

かるへく

海道の賣物は餅酒のうき物なり磨針峠の餅をくるハ米焙王のおこそかきめをくるこいつり寒く天ゝ冷素麺をすむこ愛宕の茶屋餅酒のかうこと見付の茶屋ハ見付の茶屋の茶ぬきハ本家ハ旅ゝ紙ゝ作るこみ錢の番所ゝ筒をかけ見付の田樂ゝ行るくるこそ

茶かけ千寿の窯 相や 宇津の谷

舟川の上る賀茂の情ゝかぐ五月の大水ゝかり借ゝ形ゝ出入おのゝ草の戸ゝ草ゝと首ゝ舟の借錢を納て去ゝ息をつくものハ鳴田金谷の賊ゝり水の淺深を何と文川とこくハ大きゝ細蕨ゝり天竜の中の船ゝ乗人足を宮まこふ乗ゝ股ゝ入て荷を肩ゝかけて行あるものハ頭ゝ出して舟ゝ揺ゝ立旦那の鈴をかるゝハ波ゝ切の情也る士賀茂の輿ゝ輕重ゝ日月をゝ一盃の酒ゝ衛然乃奉とやしなふ一生を漂ゝ飄ゝとすゝて雲分の男をかゝふ炎暑のゝ玄多のあしゝ桜の木の下ゝ休ゝて蟻の都ゝいる陰ゝ飲食

坐ゝ腰ゝつゝ 汁かけて出るる土のめと仏ゝ小俵ゝ付ゝ

吸売ゝ物ゝちるゝき錢ゝ耳の穴ゝ納め金ゝ入ゝよむすふ

一ゝ世の為ゝ為て世ゝ為る人のこゝ思ゝ出賛の事ゝ定めけ

るハ世をあゝ過ゝる仏ゝ

出かも むかつ 顔やうしのこゝ

宇津の山のちるみるいふ宗長法師の記行ゝ

大永四年六月十六日不二のあゝゝ立て宇津の山ゝ雨やとりしに

茶屋むかゝより名物十番ゝいふ一杯ゝ十ゝめゝるゝに

すゝゝせ

東坂や 宇津の山 其角

十番ゝ小豆ゝ秋の風 許六

十番ゝくハめる茶 蛇すつ

勢ゝのとゝ細ゝ茶の細ゝ

山茶ゝ 宇津の山

春三月 ゝ

ゝ 路通

長義を柳ヶ加ヶ谷に十五日　相葉
紫の枝　勝るをちけるや十京る　家同
をこうつるるるくるる　る行

極月十日西吟古堂のうちに

いそうゝかは足袋賣くるる亀ヶ字屋の山　具角

仆我ひとるる鮮くふのるいは十京るのむかゝのさあをいへるるそ一
枝るるは十てすくいせ旅くるるひるるくふせるとする旅情して一句を
なせりか拙よるるぬのるとをやえ徐のこゝろ今の世の十京るろ
さあるるるるるや今の十京るる敷陽といふものゝかゝちゝゝら
名物のかくさあるかるるものの十京るのゝるるあるはすして古来翁
よ依て長ゝとをいはしむ　て句他のかるるるものるり鮮といへるらす
へての考ゝて弟子長外くさゝるのものをつるる吟るる
鴨長明海道記　園部の里をるてるるにはいはゝ字佐の山るかるは
山ら山中る山を見する切ゝはけるるるるり碧岸のかるる水
るゝゝして嵯を立翠嶺の上る年高てつちんをくく眺を賞るお

ひ西を胸よいくきてゝくくよのるれはい行屑祖の服名よ流ゝて単衣ら
まるといてを懐中の扇をるるゝ命て徐風の拭拭可るゝく

十團子　闇齋

大極十團圏　都来是一貫　今此粉團子　誰成茂叔看
一二三四五　六七八九十　貫得天地数　無過無不及

遠加天竜川を西行後心集よあめるゝのるゝとあり竜の梵語
那可とゝる長明海道記る天中川をわるるとあり

よゝゝはるを浮ゝてゝるるんあゝゝつゝらの中川の水　長明

異聞集　浮于梦酔ゝ夢入大槐安国王曰吾南阿郡屈郷
為守凡二十載使者送出穴　遂ニ嚮尋古槐下蟻穴乃ち槐安
国又一穴上南枝　皖ニ郡南阿郡也

流浪　漂泊の上よこそあるるるめるゝるる独坊生るゝおを
加る国ゝ所るるこあるとめるるるるるのあゝるみるるのゝるる情保きある
ら長拾くさき布るるうゝてめるるるものを燒火るるあぶるるハ三宝義神
といるるのよゝるるなて古ゝくくる足を休ゝと極めの九坊るる送おろ

さるにても都の人はおよそ股をすゝめ遠方の旅に杖を拖て　あゆむにし
たるたぐひ人ある病死の到来は時をもまたず醫療のたすけなく懐中
の名薬もやくなく急病をふせぐ巡礼兵卯の旅路にてたふれ死しる
旧る所葬る道もなき老僧のあはれみて土の下に入おく人かさなる塚は
黄泉の下に趣くかなしさて何某の土となるむ縁をしるは犬ばかりの中に
ことに年のよはひ衣類のさまを小札にしるされて何国のいかなる人
といふ名をしるは見るにあはれなり国部の辻堂の傍に経文をよみて同行
の別を惜しむすゞ川の念仏を尋て我子の古墳をのぞく今来古往
の人旅懐の情をつくして風雅の腸をさぐりは能因が白川の歌をよみて
二たびみちのくにおもむき不二都鳥の句をもとめてすゞやかにかへか
へる者も貞室老人なり東海道の一節もしらぬ人風雅におほつかなる
ありといふべし翁の戸耳の底にとゞまる

能因か白川のうた

都をば霞とともに出しかど　秋風ぞふく白川の関

此うたを我心にもよみなしと思ひ入るれば家にて都にありながら
此うたを世の中に出さんはすさまじかりけりとおもひて人にもしらせず
こもり居て顔の色を黒くせんとて日毎に日にあたりてのち陸奥
へ修行に出てよみけるよしいひて此歌を披露せられたり

山家集 みちのくにへ修行してまかりけるに白川のせきにとまりて所柄
にや常よりも月おもしろくあはれにて能因が秋風ぞふくと申けん
折いつなりけんとおもひ出られて名残多くおほえければ関屋の柱
にかきつけゝる

白川のせき屋を月のもる影は人の心をとむるなりけり　西行

不二都鳥の二句　安原貞室　初名正章　一嚢軒と号す

是〳〵と斗　花のよしの山

室芳野にて此句をなしけり其年東行して又二句をなす

いさのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥

跡の月は三よしの雲や不二の雪

自らおもへらく章をなすと此三章をなして余業を焼と歎息するに
とぞいへり

泉流斎画

宇治の山　十ゑみ　ちるゆき　圖

芭蕉葉の奥の細道を拾て其書写のおくに付る

あるつ干つ旅や つゆりて 袖の露　去来

みさゝしたゝめ

はるあすの月かすかにてゝて山の根いとくきまる上に雁をゝ聞て故里

つまゝ鄙なる壮牧の早行の結なる小枝の中山はいとて思ふかなく

るるあなて 結る月をゝ柔のくもり　孟

古詩　馬上續殘夢ヲ不知朝日ノ昇ヲ

古き連歌に　白ふのかけるまゝ山もと

枝出く　行く秋ふる　るの上

枯草る　ゆゝしのうの月ほのけてすみのくる

賈島詩　遊子猶行旅　殘月

宇津山

坂道ノ外　降　是早天　夢　殘ニ馬上ニ不成ル眠

卅山　無　限西行ガ壽　能　使ニ詠歌ニ千古傳

揚揮豆ノ賦

毛紈

香小豆ノ能ハ一に俵ハ納ル二ハ行ものとあるとてよう

あるの俵を蔵ハ春の粥ハ疫をのぞき邪の堂の牡丹餅ハ花ハ目

を累ハ今換のいまゝ思ハほゝくとのゝ思ハ歌ハ人ハ秋の人のあ

りるるあるとて萩の花とめされて夕ハ謝謝の人ハ隣ハ人ハ

饅頭の唐額めく付てアとよりれ学のつまゝ物識のこびる時ハ赤飯と

もいふ也俗更ハ理屈人の名つけるあるて解く謎ハ

蕪蓼尊ハ君臣の義をつくゝ七歩の詩ハ兄弟の情を述ふ従兵衛

不死汁の名ハいつれの世ハ時ハ人ハまゝ由緒をゝ久あやわの丹ハ

かゝめゝ張敦の象ハつゝくゝハかれ弁の一ハの遜ハ嫌ハれハ大きハ

きゝ小ハきゝ遜ハれハ人ハにすくかる堪能を知るとの料理

に黄ハめるハいるる小豆ハの世分別ハお八ハ

ゝつ春の粥ハ元やゝとのゝき　謝謝　秋式

正月十五日粥の木　粥杖　註　加ハを焚あまりしあてちいきハ

とをうらく袖ハかゝ杖て女の尻をうるハれうこれるあるハ

つるむすめといへり　小豆粥稱して　かゆはら　紅調粥
饅頭の唐韻めく　まんぢうハ甚まるまるきもの　東鑑に建長寺
のまんをいへるくだりに　十字とあり　十字を給ふ又十字を喫[キツ]すと出たり
これハ大きなる饅頭を十文字に庖丁を入て四つにわるやうなる
ゆゑを十字といへり
謎[ナゾ]も古よりあらん　古ニ所謂廋詞[とうし]　廋詞[カクシコトバ]ハ即今之隠語　所謂謎也
瑯琊代酔編
用之字謎云　一月復一月　兩月共ニ半辺
七歩之詩　曹子建
煮ニ豆燃ニ豆萁一　豆ハ在ニ釜中一泣　本是同根生　相煮何ゾ太ダ急ナル
イトコ煮ハ今もする　芋牛房人参などへて小豆を作て煮る汁也
不死[フジ]汁ハ　不死ハ芋豊をふじといふゆゑかくと小豆との汁なり
あやめの節にかゝるあ　あやめハ　筑子[コキリコ]なり
職人つくしの歌合
月みてやよなよな釜下のこきりこの節の秋声のすさみなるらん

今あやめの節といふあやめとつゞるハあやを織まじへに似たる故也
文操上畧　かい餅ノ説　陳素
花もよしみその菓子焼きなどにおしひらめくぼかなる所に例の小豆を
ぬられハ花のかたちに似たるより牡丹餅とハいへるを今の世
の内裡上﨟に萩の花ともいはるゝハ強飯とよひ赤飯とよへ
るをおはぎのかたちに擬れハ紅白のいろどりによりて宮城野ともいはれ
あしすくてハ一件の別名にて難波の芦もよしといふされハ伊勢の浜
萩の音なき者の附ハ陳志ほとなき名のかはりなるまさ行のつくりとぞきく
されハ牡丹ともつくるもまたをかしけれ山寺にいさるなりれてそらの和尚の
もてなすに山伏の才子をとゆくてらハいかにといふらくおもはれたるに
かのかはりもちまて作りしハさしもおきなき者ならあらん　下略
大師講　大師粥　十一月廿四日　傳教大師のことに
其日ハ小豆粥のそのつかを摺餅に入擂りて本を申すし入基所の椀に
作る此式さて下さ毎におらして粥くにさまくの果あるとぞ
臘八粥　これも小豆粥を據るなん　十二月八日　出山佛の日也

張鼓のあるよりつくる　倭漢三才圖會

非鼓　串鼓　うちつみハ鼓の形うてちいさく長柄をもちてこれをうる
ものなりつるきゝ小豆ようるをもつて供ずるに拾ひてあるこ
鼓のちいさきをいふ　古く鼓といひしより今の世の大鼓のうるて今鼓
いふものハ大鼓の中の一種なり和名抄大鼓とあるハ今の大鼓なり世
の中の大鼓といふものハ古くのつゝみなり今ハ雅樂ゝ大鼓といふ物ハ
おなつゝみなり又猿樂ゝ大鼓小鼓といふものあるを八今の世のいふ
つゝみの中の大小なるものなり古くあるのかゝる摺鼓ハスリつゝ鼓
鼓ハフリつゝ腰鼓ハ三ノつゝミ又クレつゝミ今呉の樂ゝ用ゐるあるり鉦鼓
鞨鼓なとゝなるなと和名なり　都ゝ美ハ都曇の字の音也唐書
礼樂天竺伎都曇鼓あり白孔六帖ゝ都曇答臘ハ本梵乃
樂なり都曇ハ腰鼓ゝ似て小なり答臘ゝ似て小なり答臘ゝ蜡鼓なりトゝレとなる
もなつとりとなるとも長音なりつけるなるう

甲　梅庵ノ賦

僧　李由

墓を仰ぎて時ゝ寫ゝ任庵ゝ水の兩の用ゐて岩窟のあるゝ所ゝ
世ゝあるに廂ゝ孫庇をおろ下側ゝ三ゝ側ゝ三ゝ完明
東近江平田村ハ彦根より南一里半ゝあり月の沢といふ庵あり梅四ゝを
遍照寺十四代ゝ則李由なり四梅庵といふ庵あり梅四ゝを
て名ゝ付ゝ梅一本植て今三年ゝ成り四梅庵今ゝ有てあるなり銘
なるゝ共ゝ多ゝ風俗通ゝ毒虫毒也毒ゝ傷人民人草居露宿故ゝ相
贊ゝ問必曰無恙　下学集曰上古倭漢ゝ穴居ゝ巣居ゝ人土
窠ゝ居ゝ毒虫人ゝ螫すゆゝ本朝ゝ礼の来ゝおすめて穴居ゝこと
ゝ土窠の穴居ゝ穴居ゝ穴居ゝ穴居ゝ毒虫の文字を祝
詞ゝ用ゐゝ上代ゝ人民の屋舎ゝいとかりそめゝ神山ゝ伐る西
なるゝ毒虫の災ゝ防ゝ神代記ゝ大己貴命與ゝ少彦名命
為ゝ掖ゝ鳥獸昆虫ゝ災異ゝ則定ゝ其禁厭之法
穴竈　和名加萬今俗ゝ釜ゝ竈ゝかまとゝ竈ゝかまとゝ竈ゝかまとゝ竈ゝかまとゝ
出ゝるゝとゝおのゝ人あれゝとゝ郷ゝ古ゝ釜ゝかまとゝ釜ゝ

かなへ、まろかなへと和名抄にあり人釜をかまといふハ朝鮮の言なりと
いへり万葉五にかまとにハけふりふきたてすとあり又屋つひといふ名もあり
神楽　竈殿拾ひのうたに
とよへつひにあそひすらしも久かたの天の河原にことの音する
秋田子は豊魚つりとあり

常永　陰方祀竈

陰子方者至孝ニシテ有仁恩臘日晨炊キ竈神形見ル子方再拝受慶家ニ有黄羊因テ以テ祀ル之自是暴ニ至ル巨富

堅田の蜑の舟は年をかさねて食の橋のおこ子をさとくひ常の巣の営
く鳥の巣のふつくなる皆おのれ〳〵か生得なりことしの秋まてひとつの巣をいとなむ
蟻の土を運ひ蟻の塔をくみて四根の梅をかくより類然の家をかゆること
くひすなるあつて病弱か樹をとこのむ鳳凰の威をふるハむかしハ凡鳥の嘲りを
かうむるをよりそふ山姥か遠物の魔を吹上らるゝも心なくしハ一日の宋野と
おほくて称ふる蝸牛の釜お廓むとせかれてハ又おきてまめくりの部とのゝめく
蛇の貝の半造化栄螺のふたの戸をつけぬ住居なる風雅の友入乱て賓ノ主

寄居虫の家をはなれて例乃釈尊の寄可会ふとたやされてこのむのと

堅田の蜑の舟ましとをかさね
近江の湖水の猟場君子のくは捉へてみるは他のなれて魚をとらせんと
堅田の浦の蜑のとら昔よりみせしをかりふつて其は猟具を入て湖中
なくさむるも又蜑のつねなるとそ見てみたとしのかく年月を送る
今の世迄もかはらぬなるへし

四愛堂　梅作菜菊

林逋孤山に隠居して梅を愛す又鶴一双を飼放ちて雲に入又
籠に帰る林甫常に小舟を浮めて西湖の諸寺に遊ふ家に客
来る時ハ童子籠を開て鶴を放つやゝありて林甫舟に棹さして帰る
梅の下なとに客の来る志るしとせり

衆芳揺落独暄妍　占テ断ニ芳情ヲ向ニ小園
疎影横斜水清浅　暗香浮動月黄昏
霜禽欲下先偸眼　粉蝶如知合断魂
幸有微吟可相狎　不須檀板共金樽

[illegible]

蒙求　呂安題鳳

世説曰嵇康與呂安善每二相思一千里命駕安後來値康不在喜字公穆嵇康兄出戸延之不入題門上作鳳字喜不覺猶以為恭

閑居ノ賦

廬山の雨の夜の月を[illegible]

波村

や書物に異なる住らくとなるうき世の嵯峨のさのきすハ中くに住まうけめ栗栖野に行くの菊の図伽栖も柑子の垣よんおとされ宇治山のかんぞすら梅都の風流をつくれと人食大なるさめうら花を一ものの淋しきをうらやみ水をたくの雫ちを[illegible]秋ら東籬のかとをめうて省の底をきさらみ西嶺のさむきを忍んで釜の音さをりする

蘭省ノ花ノ時錦帳下　廬山ノ雨ノ夜草庵中

[illegible]草花を慶る月ちくまるきをのこるるのふくれ過て春の四くるこるあるも路ありて神を月のころ栗栖野といふ所をるてある山里ふるる入佛しにるるるる苔の細道をふるるて心ほそく住なりる庵あり木の葉にうもるる筧の雫ふるて八重ちをとなるものの寂伽栖の菊の葉ふるとおちしるさすら住人のあれハるるかるるの庵ふおきるる柑子の木の枝をたつる生るるっ雪をきるくかるひらしこそすこしことさめて此まるくすくとおほくくー

書記云武内の宿祢忍熊王を追ものきて逆坂ふあるてもちてやうつ坂ふ後を逆坂と名つけつ軍士ふれを追ふてさくるみの栗林ふ都ふてるきるつ後ふ血流れて栗林ふかるれハかれ付るをいみて今ふるる迫其栗林の菓をおほみものふ[illegible]

つくる草ふ人つくり牛ら角をきるる人くふるハ年をきるて[illegible]とす

秋ら東籬のもとに　採菊東籬下　悠然見南山

笠を重きを忘る　公立　童　呉天雪

茶粥穏然のかるくるは五臓を治し帝子皆芳のさびき音はるを聞をかへ
くり詩を三籟のおもむきをさぐり歌を山水の風を好むを桶一つ鍋二つ
置三尺宋四五徠を鼻の柏子をおほうて帝の毒くをはすれ自利の
自由を得て耳のあやうきをのぐる壁一重は市声の喧しおを負くてす
れ一枚は車るのおろかを避くるせを捨せよ捨らるるもひつるも
きてはくるこそ俗の宗居くハいふくるん

宗弼ぬらそよう隠居の上をつる資ハ今もとしよりの脇中へ入
て宝をもつく綿子をつるるう詩を三籟の趣を荘るは天籟地
籟人籟のるをいふて天地自然の理利をさとると文意をふく
めるう西行ら山家集の風骨と和漢の粋白を取るるう千万るか
ごとハ俗の隠者の俗ゝみを五平宋は勝をかめ世を負つる
ゝを是迄隠者の上をのてゝ小人の宗居の為をのるん
ゝの文段なり

ふく草　浮世をおもうん者慈を絶一つは拾まきも

宗居の種味噌　浮世の砂り納豆汁　共角

今の宗居ゝく者をてゝに食は八珍をつくゝ酒は五味をこむ楊枝
の障子は四季の花鳥を彩り皮牙の柱は樟ふくゝの名木をかと
む鶴は花紺青の文字をちりそめ軸は八幅の絹をちりそめき百
は水を流へるき百人亭をきつくゝ琴三味線の夕べ小歌浄瑠理の曇
隣家の祝ふを聞ゝ行人の足をとゞむ粉白く黛翠るるの屋をつゝ絵
屏風ゝく袖をきゝ廊をめぐる牡丹芍薬は彩色をつくゝ蘇鉄海石
に戯をつゝ屋は偽をゝ文跡をくぐて物ぶりゝ獨り金屏を立て月の
光をを奪ふ或ハ地黄相思子を植て地をつくのひをを伐るを伐り
て八百の居は夕顔の俗屋は隣の生業を誘ふ相類の菓楊梅
銭の美用をきくこゝろの宗居も彼清貧の宗居と名を同らせんや
所人いるるのあり小人宗居して不善をるをハ宗居の尺度るを十
分我いゝ今の宗居ゝくものといつるう小人宗居して不善を
かくと所人の言をふを力るを宗居ゝ名のくるて善をるを
をとゞのゝ金銭のようるふりて汚名を残人をいやしめ

るゝ十七張心の文はるゝ今の世より多の上よりしきく歌をいふ事乃
挿花の道をはそれ人は教をるのるは老て世をのがれ其所をこのみ
数をくるはるゝまれ〳〵して其多其道の愛樂ゝるとゝして多をこる
ふ他を為しめ金銭をむさぼりとる者多〳〵此文政の頃くふ人宋
居して奢をるの家業をる代よりようせおのれ八宋居と号して隠宅
よ花美をかざり於人をあつめて酒食を善美をつくし世り
そしりをまゝに利欲をふけて笑ひをひく者むかしも今も
小人の至居のさま同〳〵なるべし

琴を来るるすなわち古事記に天の詔琴(ノリコト)まるあれてゆるとあるは
神代よりあるまつ伝るまれ神のれいを問むて其詔(ミコト)を請ひ
ヤスるゝ琴をひけり附に其神琴の上に隆書をしてくるか
うりてみことのりをふ琴とつる者を知へし河海抄に和琴八例
特諸(サナキ)例特(サナキ)丹の尊のれ時つくりそめしの
のちにかくむるにはひの樂器くさく後つまりて来る
皇国のうりあるをハ大和琴といひかゝるをハ唐琴といふ

掬みのちにハ今て琴(キム)のこと箏(サウ)のこと琵琶のことなといふかくて中
むかし廻八代倭琴(ヤマトゴト)を常に引くとてあをれて時にもろ〳〵の楽器
の中の最上と定められを神代より海き国ゝ大皇(ミカド)のもの
なれはなる十掬志に重し貴し あまりにやのちの世に其あるに海く
秘て引くハ侍るあることにあらぬ世(コノナカ)ハいふて世に其に
のゝ〳〵引てもつに神技ひるに目ふるるあるハ〳〵もく
くちをくに心きるきるのうゝ九て何のあまる海ひめて世のりゝ
ゝ物の人まれるるるて物きてつるゝやるのれハるみ立くすとおる
ふかるてやめするといふものをゝ右にる託傳るあり

三味線　小歌　伊留理

相傳ふ京師に二人の瞽者あり瀧検校(タキ)　沢角検校(サワヅヌ)といふる絃歌
をよくゝ嘗て曽子(ソシ)の孫伊留理と義墓(レニホ)のる跡をあくはる書十二段を
扇を拍てこれを語る人ゝそこれをふる生佛ゝ平家物がたりと相彩ま
ゝ〳〵四條東洞院彫金(ホリモノ)工家何某ゝる隆弘也旦法刀(アハシ)の傀儡(シキヤウ)をい
ゝ〳〵一絃の琴ゝこれを和す

後陽成帝これを庭に見て引田淡路様に任す近世殊盛也

文選潘安仁閑居賦　灌園鬻蔬以供朝夕之膳

隠居虞仲夷逸ハ隠居放言自中清廃中権

和名抄　疊　和名　太々美

たゝみといふ名は重ね畳ぬるよしなりひろきものをおりて狭くおりつむるを
たゝむといふなれハかさなる心なり其畳に又異あり長帖短帖狭
帖半帖厚帖薄帖帖の字畳と音をかよはし用ゆるなるへし

書記ニ菅畳八重　皮畳八重　絹畳八重

万葉十一　たゝみこもかさねあむかす　又　畳こも平郡の山

牡丹芍薬　芍薬ハ花の容ち綽約たり故にかほよくさといふ

草木の類百花の賦にくはしくいへり

菓擣　今の世ヤマホリトかなつけたり古き世によみてキテモリとかな改

招魂ノ賦　支考

西方に吾翁の魂あり行ていつこにか迷さむ魂すゝかに帰来れと神無月十日あまり湖南の旧草につく人在て魂を待まさハなすへつ帰り来まさむかすかにひそかに帰り来れ蕉門は春の花翁逝ハ秋露きて別をうらむ蓬窓の秋の月蕉翁ハ人蕉て住れなるぬされハすゝれ草の住みさせ世の中に何の卯の花の垣根とハよりみりん時鳥の浮おもしろんつゝも春の扇の絵にかへりすやあらむ志ハいまひとつこに行として還るにおもむ還来れく王孫むかしら草とおもひぬ蘼蕪の香いまや哀にうつむ土のして花翁の穂に出てとの方に待久なりとかへりみむ魂すゝやかにかへりませ

西方乃吾翁ハ芭蕉翁をいふ湖南の旧草とハ住庵をさしていふなるへし翁のこゝろをひらかすさめ中文なり

王孫　ヱニレイサウめくり草　又つちくり　万葉集十七

我ねるにわするつちくり心中もおもはぬ人のきぬにすりつけ

蘼蕪の香いまや哀のうつむ　唐孟遅カ詩

蘼蕪亦王孫草ノ類　送ニ春香一入ニ客衣一

蕉菴　一名　當帰

東花坊ハ此世のあはれしらせんにハかの蕎麦切ハ宇津の山道のおそろしく思ふにハあら
ねと首の心ほそすゝしさハいよいよ豆腐ハ板の都近く蒟蒻ハ甲津の里乃
名にしあへりいかで世の人の風味にあかすらんや琥珀の霜をふるハ葛や好り
はしく朧の氷をふくめる酒さかなにみえかくれ香花をさゝけかくす魂を
つ還す夢の魂　何にかあらんむさし野や武出の餘のむかしおもはん水瓶をと
なりて山さくらもさくも長等山乃山さくらもさく其のあらゆる物に咲散りを
好みあはれむ事も比良の高根に入江の駒とむすふ人こそあはれ首堅田の秋
の夜寒に露て八病床の旅寝に其身を俤しも其後のくもりへそらに見へるなし
きるハ水茎の国の名のこしむらん鏡山の西かけも今宵ハ待人あるそおもる
松風の音羽山しつやこなたの国にも蕎麦の花も咲くる世に逢坂の関
ハあれと粟津の原のあハでゆかむ魂くるは梅に来れ世にいふ天堂に人の心
あまさるハ風月の情ならん地獄にもくもくそのふかくして風雅のいとまもなる
んされハ後飛鳥かけの秘事ていふかけにおいせと在ぬの内の釜の蓋ならん
に地蔵なき色のこゝ白しして梅の花の咲き所こそおいそ閻魔王宮の人く

きよし世の人の是非のミ見むとするんそも折とみける此世もあるまし志るるを杜也
嵐蘭かしなかり園田何し岐山の落居近くに所在の心自らへまし名と十
とせあまりの風雅の妻におくれられハ夫も心なみ不あらておもまへと自ら行も
よ志からハ魂誰にかよふらん伸りて気をみせらん也魂よく還りきたらん

嵐蘭かるすハ巻ミ六歳菓か諱にくはしくいへり

近江の地名に湖水、賦にあけらる

園田呂丸ハ出羽国羽黒の禁の人也翁に志を乃一夏武江の深川に住
まし其後洛にのぼり年を越て二月の末の旅中に病死す

當帰よりあはれハ塚のすミれ草　翁

笈日記　出羽国羽黒の本とする園田何し呂丸此世の生をはらん都の
方を由りしらて志なゝ菜月の中ころりかれおて野店の月山橋の霜か
緒ておもひめるまてにつゐるとやかくて武の芭蕉庵に旅寝して志けし
の秋をくらしみ洛の東花坊に仮居して其ものやかて来るむるを待其世の
花も見まらん取くも支考にくみして大和路の行脚すへきさるとさため
しおもひあわれにむ月の中ころより病つきて何のすへきやうもあらで

二月の二日なるに為まうでるやさん八郎らつはものさきはあて書
らつとうく傳書はあり風つまるよりきを伝へ先人をさん
うちみめて〜夫雲水漂泊の者なりつまるよりきを誰〜
おもふ人其うつをを少伝へ侍るなりてあれとそ為るなお
日ふしのかつて張るをうてをあれむをいるまて此時の
まうてうて〜

死よまて其きさきの花の時　支考

序　一羽いて　都乃　土の下　洒堂

土　うきふ　あつれや　春の草　乎有

陸奥ちう　坂田より羽黒山の麓かうる為町旅人舎あり
此所芭蕉翁圖月を尾花沢に泊て名月の土をぬ其あるうち
と尋入る跡をうるに相續てにきりく後世に登山の日和うかひそ
ち遠国の事今人をうもをくようるべき為きをかるとを
吟よりつめのけての俳談外をうる糸筋のうと来るをいさらい圖
月の懐旧を述んと生をしめて石に竜のうすまひ首よ為んかうま

とうかう五茶こうしき捨石は苔よ埋も心うき浙情のみうを渕
浙のさうひうをうさうき

樹も石もありのもうの夏さしよ　杭葉　考茄
音をかを　乃　雷　乃　碓を　引うう　則堂
鈴　力　数り　碓を　引うう　則堂
寄ようすて　元　石　水　呂例
十ちおの　老　納　六り　鐘　助笑
茶　らうを　鶏て為る　獣　普操

むかし俳諧は詩歌の信ありといへれて是の花よる性の水よすのとを
いつれの信をうく人と俗をこうをもて世をいとをみ俗は是をもて後世を
くのすんとせりは中比は俳諧の信あるとうをふ〜やうりて信あるうを
すうくうるとうら偽あるうをうをはうるとをうるを又炭俵後猿
義の要をうて　今や俳諧は信あうをうをあるをいをむを世の持を
はうをすの跡はいうはくもあるはとはとはとつのをうあうをうんや
此日の魂すをやにかつを考んかつをは吾為をせんうをひまをうか

つまれ浣濯する事きこえ

謝諧の式又は其道の心は熟筆の心は糸撥を白の法撥を正確の用ゐる白法其外くさ〳〵のるゝ作の説巻三四 俳諧發靈文巻之七 謝諧の頃 巻之十 詩歌謝諧の辭 巻之九 四文章の註解よつて

敷〳〵古書をひらいて初学ひのくるとすゝ

念仏四句 四句所作業趣向於彼 謂之四句

くるひすゝ目白をすゝいつてのく 朱拘

学や 椿の中を ゝゝつゝま 出泉

くるひすゝ乃 呼ちゝ あしゝる 茱細こゝる 尼丸

百鳥ノ譜

嘉を伝あるものの也をつゝまらゝくゝ迎てゝ昔陶淵明の遠摩の風骨をゝと

ゝるものハ静る淵明の風流あるゝをきゝ伝されゝ和章の花はあゝゝゝゝひ

ちきめる時栄門の月のあゝゝまゝすゝゝ扶るおゝ心のひゝハえまくおゝふ也

まゝゝゝとゝきゝの音絃をて衣裳をおゝをる作るハまゝて伝雨もいてゝと

ゝゝんかの荘周ゝゝゝの胡蝶とあゝつゝる是をゝむつゝとゝハおゝゝ

白氏文集 池鶴八絶 白〳〵内

鳶 贈レ鶴

君ハ誇ニ名鶴一我ハ名鳶 君叫聞レ天我ハ戾レ天更與レ君

相似所飢来一種啄ニ腥羶一

鶴 答レ鳶

無レ妨レ自是莫ニ相非一清濁各有レ歸鸞鶴郎一中

彩雲ノ裏幾時カ曽テ見 嘶鳶飛コヲ

陶淵明 姓ハ陶名ハ淵明のち潛と改字元亮又五柳先生ゝゝ

傳燈録 達摩大師くゝめお林ゝる居ゝゝ九年二祖の為説

法す只教てゝゝ外諸縁をやめ内心あゝくゝるゝゝ心牆壁のゝく

もちて道ゝ入ゝゝ達ハ通也摩ハ大也達摩ハ通大とゝゝ義ゝゝ

荘周ゝ夢ゝ為ニ胡蝶一栩栩然胡蝶也

昔者荘周夢ニ為ニ胡蝶一栩栩然胡蝶也

時珍曰 蝶ハ蛮の類也茅虫化す百合の花蝶ゝ化す本の草蝶ゝ

化す絲裾時に化す皆各異なるがごとくなり蚕の繭すれば羽化するが如く朽衣物も又虫を生じて化す草木花葉の化するもの則桑化風化する其色又各其虫の食所の花葉及び化する所の物色を考へ

貧僧のみるるわしの山の梦をむすびしる
友の僧のはめてけてよめる
何をかは思ひ出くハおもふ遠慶寺にて一物も不
とよみしハ是

一物もなきにつるる心こそ本来空の一物もなし

雉子の鳴声をいとうときに百千矢の鏃をのがれすやあんといふて一句

その余蔵めるハ韓信の軍の文武をつくさるものなり

雉入海化為蜃　雀入海化為蛤

季立よ雀の方のをを出して雉子の方をかへて蜃ハオホハマグリ

韓信ハ淮陰人前漢之功臣蕭何曰至如信国士無双也

百年

来の神の志けき言の葉の玉ゑ花ゑ雅なるのかろとそ思ふ　貞文

かきくらす雨雲の雅なる羽音よ鈴を鳴くてそ鳴る　西行

蒼鷹の人を足こなして眼の内よあらくうるる文智をきるるいとうて

さふと一鷹の名あるものハ世の人をもつて

仁徳記ニ云ふ四十三年秋九月天皇酒の君をめしてうたを歌て

曰ふ天の鳥の酒の君と酒の君とてやすきく百姓の人はなるを名つけて

倶知ニ云ふ今の鷲是なり

夫木集

あしたはさるあるぬ高をおくて沖なるくちのやうな尾

蒼鷹（オホタカ）　箸鷹（ハシタカ）　鷂（クマタカ）　雀鷹（ツミ）　鷂（コノリ）　雉子（キジ）　隼（ハヤブサ）

西園寺家鷹百首よ　鷂ハはいたくうの夫なるうそ

雲井つゝみの山の高嶺のかつらの花よりとる秋の菓こそ

にやなるもすなるとをさくん　ゆるきぬつくの高鷹

夕りかけ行もさ〜羽の浪きる羽の芝の糸やかけきし

はや鷹ハ世おの鷹之高羽のぬけるを見るこめて胡て羽のひそひ

[illegible]財宝の聖霊のはをれ物を[illegible]

[illegible]

淀殿乃[illegible]

[illegible]

[illegible]は集　　貞徳

[illegible]

犬よりも物をぬる分のあつぬるはかりはとくにくすべき

よきぬのさらるつけてとるあつめかりる[illegible]つくはり

かの仆鷁の遠生の者ら膝を入るまる稀ハ大鵬の雲の一万里をうらや

ましくさくハをのれをもむのうてかるらやむ方るもあるらの

風風といふるハいふるる[illegible]

壯子云　有鳥焉　爲鵬　背若泰山　翼若垂天之雲

羊角而上者九万里　絶雲氣負青天　然後圖南

且適南溟　仆鷁笑之曰　彼且奚適我騰躍而上不

過數仞而下翱翔蓬蒿之間

さきあんらかやくきゝ

初便集　[illegible]仁さく　起ざる[illegible]　乙列

[illegible]　許六

稻負る呼ぶるもとやそこ[illegible]ハ春ハ住るる[illegible]

樫[illegible]の二[illegible]其實をためる時の[illegible]と[illegible]

起ふ[illegible]ん[illegible]絲木くの花咲[illegible]の雲[illegible]時を弱[illegible]

声の[illegible]ひやうに[illegible]

のれ[illegible]ハ[illegible]の名ハ声の[illegible]ひをいつる[illegible]

[illegible]ハ[illegible]白の[illegible]

稻負る呼ぶる百[illegible]　傳受[illegible]　諸説[illegible]其一二を

あ[illegible]命[illegible]

[illegible]秋の[illegible]

山田[illegible]秋の仮[illegible]

我[illegible]

和歌[illegible]稻負るハ[illegible]

[illegible]

あつまりを稲負鳥のをしへすハ人を馬飼ゑまとハさまゝ

大和ものがたり 傳ゑるゝ

さのふけていを負鳥の鳴けるハ居らくゝとおりひるゝ

頃ゝ和名よハ 二ハタキ 二ハタフリ トウキヲシヘトリ 今の世人定かゝ

只稲負鳥て秋来て秋の田を鳴ゑるまてゝそ侍ゝめ

秋の田乃稲負鳥のこゑたゝ木の葉伊ゝ霧の降ゝむ

一書ゝ 之ゑ化用の歌ゝて

民の指秋の宮中のゑをてゝいをおほせゑゝと人をいひゝる赤人

いをゝゝの指をいゝくのいゝゝゝる 稲負鳥のゑかてゝする

右のゝゝハるゑゝ 板倉橋 太平記ゝ 侍中歌

かゝゝゝていをゝ苅つる山田ゝ稲負鳥らしゝめゝさに 東博

右のゝゝハ歌なゝ 侍ゝ

七車 山橋の壓ゝる 校ゝ 猿の二三足ゑ四ゝまて 撃ゝ猿ゝ 洲のいをゝ

よく 蒲て 具ゝとゝる ゑを二ゝ三ゝをゝる 画ゝ

さゝゝ系や いゝる負鳥 よゝふゝゝゝ 鬼ゝ

次韻 厚ゝ 吟ゝといふ五文字をゝゝふ

春 流ゝとゝ 稲負鳥ゝといゝるあり 其角

日本後記 四十巻 春澄 善縄 作之 此書元て世ゝ侍ゝ

桓武天皇 延暦十一年ヨリ 淳和 天皇 迄を 書せり

めんゝゝゝ猿ゝまて おけ 鳴ゝとり 其角

鳴ゝゝ説ゝ多ゝ只春の雨と斗 山ハ へゝゝ

山里ゝ雨をゝこハよゝゝゝる ひゝゝのゝゝそ 侍ゝとおゝふに 西行

百ゝ多ゝ 鶏ゝ多ゝ 万葉

るちゝゝゝゝゝゝ ちゝゝの毎ゝあゝゝゝゝゝ 歌ハゝゝゝ

系ゝゝ 校のゝゝゝゝゝゝ ちゝゝ人 麦ゝと 居ゝきゝゝゝ

又 三鳥傳ゝ 吟ゝる鳥 稲負鳥 都鳥

ひせまき屋ゝ ゝ来ゝゝゝ ゝゝちゝゝ 一斗

ゝゝゝゝの中ゝ山ゝすゝ岩ゝあゝゝゝゝゝ ちゝゝみゝゝゝ尾ゝゝみゝ

すむゝゝハ草ゝかゝゝ 林のゝハ鳥ゝゝ水ゝゝ口嘴ゝゝ尾みゝゝかゝ

しく秋鳴とやら花のころも花に来鳴ぬなきしおとりハ水にすみてよる
鳴とやら里にいつる時なく秋鳴とやら花にまでとハ鶯なしあやしの説
ときさ所に花やなに鳴出せる声をかし
雲雀ハ終日に鳴くらしこ呆く空にま伏にあらむ此もの小春の空をよく
おほくて高羽の囲つくるとて空と鳴出るるにかなつけて囀るなるもなけ
きハあけれさひしおものをのそおりか時もあるなり
此巻諸なるの内 解するに及ハざるものハ殺ろ一二句つきを志るす

京中やまのまつりの鳴雲雀 [illegible]

見きものひとつなき空にひろりうな 李由

[illegible]ちくうくるる雲雀うら呼 野水

便舟や雲雀の声の瀬くなり 史邦

三光と鳴時に月日星といふなるよしむつかしきおもハしめや佛法僧と鳴く
なありて高野山にのみ住なる是をも三宝とそいひそめしるに鶯の
法華経と唱ふるさるハ世さなる老めきたる業なり投壺の美酒をかひ
布穀の誇をぬけよといふも皆をのれか故なり孫と世の人の志りかむる

ものなるか蜀魄の不如帰と鳴ハあらためて挽物の声なりしのみ
性霊集 後夜聞佛法僧鳥詩
閑林独坐草堂暁 三寶之聲聞一鳥
一鳥有声人有心 聲心雲水倶了了
佛法僧と佛法僧と鳴なるを深山にすめる又慈悲心と鳴なる
ありかたちひとつの如く蕃と足と更し声もすくれてなきなるにな
れり是をも慈悲心ともくりて鳴なり
朱氏舜水云日本の鶯ハうくひすにあらぬ雑鳴なりといへるとそ
新井白石云 日本の鶯ハ春なるとかきてよしといへり

鶯やなるて一声のあやまとり 宗祇

うくひすのちる音いさよし朝日ら哉 宗牧

あさねせん 鶯の鳴ぬ森もうな 紹巴

うくひすの声にもとまるふみつき外り 、

鶯の声も雲井の朝附日 昌叱

末信へハさきりなき来し鶯の羽風そ花のゆすり見ぬる 紹阿

花をもて客のもとへ送るものなり、

投壺 礼記 投壺篇に互ひに礼を正しくして酒をのみ楽む時に投壺をして矢の数多きを定め酒を呑ませる投の字を提とあや

きつてゝ投と改む

布穀の稿めけるとつゝふ

脱部布袴とゆるあり提胡蘆 佳美酒とゆるあり

花希文

越上聞子規 山谷 禽語ノ詩注

夜入翠烟啼 盈尋芳樹飛春山無限好猶不如帰

蜀魂の不如帰とゆくハ鳥の声なくのこと云ふ詩ことわり

なるを不如帰とつけるかこつけるを他ゆる東花坊の作意なるべき

付て云ふ詞也きくなくいふなり同じ

清氏 桃毋子 田植る女の謡なるべし

ものとまるよおれよかやつよおれ植るを家を田植

としよまるもの者ぞ 花は 新を 家祇

おもふをハおもふ故 おもまれ

時鳥 遠く山ゝ声を二三度、

家長のかける物よハ月中ゝ近附るのよるゝ時

月ハ無沙汰の時なるもたえ絶て

雪なる時ハ月ハ時なるへゝ

暁のる吐ゝ傳ゝ時まれ其角

銭ゝ 謹 我須戸の哭守るゝん 冬なる 氷花

柱於る山田ゝ青し 冬なるとゝ 調柳

盈盤ゝ ゝけゝ ゝよ 冬なるゝ 舟竹

かんこゝ 烟草 ゝく 細ゝ 稲花

陸奥の かゝ 郭ゝ 国ゝ 羽の 地 取の ゝ ゝ おゝ ゝ 共声と足の

仇ゝかゝめ ゝかんこゝ ゝ 他ゝ と同じ 時ゝハ ゝ 落ゝ 爪 二ゝ 乾

ゝ ゝ ゝ

諫眠を催すに付きてよみて
侍成りぬ叫ぶ雁を聞くと
俄惜乃作者くれぬるやあけぬる　許六
秋の雁の江天よりおりる時分の暁の雲よりさけみいれの定住ん雁もあ
りなんと附るなるべし
古今注　雁河朔より江南へ行る時くてくる気まよひ縑織を
思ふるに江南ハ饒饒の地なれハ行ハ行ハ腹肥てくるふるふる
るるハ人ふるんを思ふて芦の生さ野まるをふくみてそうけきを
防くよりの白氏帖ハ上虞縣の雁ハ人の為ハ田を治む春をふくみて
草根をさり秋をついてみて其ひとりをのくをみて官より禁じて
民屋を害するるなるべしよりの　雁の性陽ハ寒ハ久因て陽ハ也
博物志に雁粟を食ハ翼重くなりて飛ずあるべし
抱朴子曰智禽ハ銜蘆以避網　智禽ハ雁也
雁ハ雲井の路や雁の声　舒元
雁ハ行る雁ハ路付の板をうる

雁等て鴈よりの縁よ吉野ハ、
雁の絵や　あはれかけて比良横川　、
雲　ゆくる　之更よ　雁　丁の声　丈草
鸚鵡を思ふ　鸚鵡ハ武ハ武ハ
うあるみむハ琵琶の弟まうり跡の意を呼つくに心をつくるむ嬉しの
なりとうの日くあるを日くあるを日くあるといふて配あの詩ハ
ものハえいをなして万里の別を考ふひ行るをうや　註技業十巻志八
杏鉤鳥渡海　桑王君故事ハ見えおるもひかはるるて
蒼鹿鳥　鷙鳥ハ而受縲　鸚鵡　恵而入籠
五元集　長さきや源氏ハ物のあふむ　其角
桐の花　秋後のあふむ　其角
燕ハ物ハ物ハ物

かゝるとよみつゝけぬるまゝ孤樹を出て夕鳴を時つくせハ誰かあはれを書もおくらんとあぢきなきるゝ思ひ

弁百物語「中納言はるのゝ歌よつゝるものゝ
につゝくゝめのすひゝゝつけてのゝゝふをゝみまつて行ゝ
ゝゝあんとゝくゝてのゝゝふやゝハつゝくゝめのゝあ貝ゝんゝ
るゝとのゝまゝ

史記三代世表才一云詩傳曰
湯之先為契無父契母與姊妹浴於玄丘水有燕
御卵隨之契母得故含之誤吞之即生契

天智記云六年筑野郡獻白鷰一ツバヒヨ 鷰ノ古訓也

江湖の信 雲水行脚の僧をつふ也 江湖ハ世の中をつふ云也

ゝの獨よ入りをかくす ひるゝ雁 其角
水よつゝて流ゝるゝ ゝゝつゝ 支九
ゝゝるゝ ゝゝ 舎羅
行ゝゝと ゝゝゝゝ 涼菟

鷰鳩とハ春のかゝこきゝの也青草の雲の雨ハ遥々の魂をおくらし
芙蓉陵の曉の雲ハ旅人の袋を伴ふすゝてあゝるものハかゝるゝきゝ
水鄙ゝ隠遥の風情を沒ゝ

鄭谷詩 莫向春風唱鷰鷰

交列詩 鷰鷰声中懷南不思北南山閑之則思家

詩有鷰鷰天ゝ

遥々ハ旅人のゝゝ 遥々残月ゝゝゝあり

星月夜のゝゝゝゝ

あるは或はかの妹ぞ山ぶきの花の盛りに立ちかへりて
略ハ中ノ立時のあるに馬蹄をつゝむの風ひるがへるなのあり
ひさしいとにくゝ彼沢の名れを紅山の風情をそなへ八月のこの
雲夢ときこへ沢をいふる沢丹のあん
心なきあるあれハ名れを略ふ沢の秋の名雪西行
月やどる沢田の雪よふ沢略の水ふるかゝりこの声 張河
雲夢ふ沢の名周官職方に荊州の其藪沢を雲夢とつゝ
方八九百里江の南なるまさる嘉客技江夏安陸なるの
地なり今世に是を八則ち別て是をいは則二沢なり 尚白
略立て日ふうす雲千くれるゝ
しきふて一筋きき 雪 この外 氷花
略突のるる突すふ沢をの田外 胡及
案山ふ 文素
白略ハ人をさけてをのれ静るものなりをを諫載るのれ人を

さひしくさせ沢なへて却の花のふるに夕日かけるを木のふる
沢て山ふるおひるみの移る時地略のさるに志れ移ふ是ハいとさひしく氏
よのかひくゝ西の日をかるゝめとうやを百花の落きおるく路のるめるとしてハさるに
新拾集ハ亭子帝大井ふ行幸せさるるる時の詠 略水ふ列ふ
きるれハいとこの色まるふるるる斗列ふ
ふき沢を洲くせよ 早ふ 義
柳かゝくゝくらつふるう かんこう 柳居
帰くちまるおるる 宋ふる 麻文

百花深き處 羅 隠詩
不論平地與山尖 無限風光盡被占 採得百花
成蜜後 到頭辛苦為誰甜
案の蜜出てまるひありきめるいとおりしかるる笑ふ
顔るあるるさるくれの老僧やむしる市ふる松ひおりるふ
天武記ニ夏ニ白茅鶏一 いひよハふくろふ
毛詩注 梟不孝之鳥 関西謂之流離一寄梟生子大別

食其母一桂林人取養挿家苑
流離らるこゝかゝてかなしきまゝ流離らるる乃
吳名也

ふるさとのあくあめ土ゝ毛ゝてむしの情今を化るゝ
巢ゝ生て母をゝろふゝ土を化てゝゝ也
蛍白集　往さめをとゝ巢の声のゝまをけとるゝとなへて乃
人いひゝゝ流ゝおのゝ毛衣のれゝゝやあんとつまゝ旦るゝ
ゝゝ松のゝすゝのゝゝ流ゝくゝゝをおゝろゝ
ふゝみけちゝゝの音ゝて物おゝろゝゝふゝの声　西行
青柳のゝゝゝの山のゝゝ里のゝまをけと巢の帰、
本気やおもむ切ゝる　盃のつゝ　芭蕉境
みつくのゝくや末の巢のゝる哉　月尋
木芽の峰ゝゝゝゝ牧ゝ　江戸
さゝゝゝ八みつゝ笑へ　部ゝ　其角

保章に住るる翁八其声すゝやゝに世をもゝかゝる山ゝちゝ水ゝる

遠ゝゝ流栗の穂の翁ゝゝゝゝゝ生てあゝゝゝる了

栗苅れハ沙弟ゝ下ゝゝゝゝゝ　許六
ゝゝ巴ゝ着とめさせて　ゝゝゝ
ゝゝやくゝゝゝゝゝゝゝ　ゝ
ゝのおゝゝゝゝ　ゝゝく　翁ゝゝ　ゝ考
かいすゝゝゝ　ゝゝゝ　ゝゝ顔乃翁ゝ　琴風
ゝゝゝ朝将ゝゝゝゝゝゝゝゝ立ゝゝ八翁ゝゝゝてゝゝ将
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ羽のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

木つきやとんやうきのうるおひよう　本兒
木つきのおほひかくしつりうう　文章

韓昌黎送張道士序

張道士嵩高之有道者通古今學在文武長才
寄跡于老子法中為道士以養其親

木づゝの枝一枝咲あつて春のあゝいかりうめるをさし出る姿の陸ゝ
つゝうき氣なる障子のかゝりくもる半生家るに物のかけのまとゝ
まくまきもあくあいくるるるにゝ作んいつるく物ゝ遠者
るるるの思ふに舞ありるるひまをるるとるれハあくくしきう

文意ゆるなれハ解よ及ハ

軒の雨の晴をよろこひて行やゝ雖の物まつる岩ゝ市人ゝまゝ作んの鶏
は碁信の風情すて人の傳をうかひあくくあるう求時を同一あて
をけれゝ多をあゝしるおるりはやたに遊泥のけれをいをれ岩を世の所
よ出て物をかゝるるとおもふハさばゝ悟さくるる世の人の上をあをに
ゝくゝるる湖をいつゝ青雲のゝさまよあくむ徘よあゝれむて

古今記　天ゝ彦ゝ葬のるをいるくゝ
則そこに雲をつくりて行の屋をきざゝ持ゝ鳴を幕指ゝ
翠ゝるをれ食持ゝ雀を雄女ゝ雉を哭ゝてかくおるひ定
て日八日ゝ八日をあをひくゝ

淮南子　大厦成而燕雀相賀　湯休昊而蟻蝨相吊

鶏ゝ碁信の風情　かゝれゝの　者ゝろゝ雲のお来　孟
春つるかけのゝれ尾のゝゝ尾の長きゝ物おゝ
物おゝをい物を鶏るあをけるハるて鳴かけのるゝ
あきくゝや者をかゝ神塔ゝとよのるるるくゝ
作ゝきゝゝよいそハ誰をかく　四つけゝの音ゝや作ん

幽冥録　宗ノ處宗常ニ買二長鳴鷄一著二窓間一後鷄作

人語　與二處宗一談諦終日不輟處宗因テ此功業大進

世ゝ人と葬る者あゝて常ゝ顧るとゝ今ゝまゝもあゝ称とゝるるくき業あ
れハ浮て酒呑色價ゝるゝやゝつゝゝ物ゝいゝるゝハ住るきゝるるゝし

早川は魚をとかつきあけるをのれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]おとゝ作[illegible]ん[illegible]
おのふらせめて[illegible]
るさハ[illegible]

葬ハはふりはふりハすつるなりいの[illegible]を葬を神[illegible]葉つ礼[illegible]
ちをつぬきてもちて多敷の害ひを退ふ弔の字矢ふ[illegible]
つゝ草にあゝ[illegible]
[illegible]

浪[illegible]せをこゑ[illegible]て人[illegible]
万葉七 鶏 [illegible] 丘山をとゝ[illegible]する西行
[illegible]
神武紀 [illegible]
いさゝ[illegible]

[illegible]
おゝ[illegible]
[illegible]
十二月の声の中なる 鶏 [illegible] 浪化 木導

[illegible]
鶏 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

きるめくるもおぼくるるう

行くの中将を来不考

みち果　何か故ノ後辺双白鷺

死憂　頭上亦垂系

髪あくる浦　芹とかはぶ辺の神　長角

七夕つくしみといふ考

中く水手　敷かくよりも　鑢もよ年

楚墓の美ハ一夜の枕よ弱き驪山の髪ハ万里の雲を陽つあ

の嵐よ錦帳をとこうせハ李夫人の影ふくひかるるるるもきくはは

翡翠といふるハいるる美人の魂よろあん杜子美ハ衣裳よ咏といふる

ひるるるて外をあし名よめてく見をあ方なとなきハはなきくるやあやし

ものふん名をぴよく其姿のおるいるく琴瑟の中らきくなり隋璃といふ

るらせのくのきをるかさるる

楚墓の美ハ呉王西施の故

驪山のちきくハ　長恨歌

驪宮高處入青雲仙樂風飄処処聞　緩歌慢舞凝絲竹盡日君王看不足漁陽鼙鼓動地来驚破

霓裳羽衣曲九重城闕煙塵生千乗万騎西南行

玄宗幸清宮ノ車ニて貴妃ノ霓裳羽衣の曲を奏むる時錦山

及逢て帝城を焚かすめられ蜀ニ幸しまつる万里の雲をくくの

と俗ハ　衣裳ノ咏といふさるるるてハ

杜律五言　桐葉坐ノ題詩　翡翠鳴ニ衣裳

翡翠ハ古事記　翡翠為御食人　そはくとたくよあう

又かはのとり　魚をとるる也　諸　和名ノ

山河のあるくの上のかはのくかけるる時を待ち時れる

そにらはるく青翠すて魚をくくあり　蓮ハ　特はなん　六尚

かハせみのるくあ

琴瑟　日本のをしをを舞民よ足せるる行といふあの西土ノ

ひるるる西土の琴瑟ハ対よちるるといひしとを白居易日本ノ

琴あるるるくハ雄鳴をといふ

服のくつ人よとせとや　野水
代主のてくるゆやをしの孫　本節
をしるの列るくろ　新あし　里圃
雲の寿をかるうるて結る行あるいやしく待ち美めるつと
くひくろあめと風情やくおるやうくしまて知るあらいぎと
なるくろ

雲や　春迎ゆく　蔵うつく　去来
年人ひすやうつ言ふうゆく身のかるき　通雪
雲の列るくハやうそ　立合点　加行
雲や　二神　五合の　蔵年貢　曲雪

雲る為の世をさくるゆるる為斗菅のいやしおりのいあしをよハおる
どいあしくるる雲起て雲載の末のをるつよてらえおるひ雲すやいる
る附ふう息るとつまる雲る等ていくくるくさけ行るなるそれる神の
つるのくるくハかるるるひるせまず

世俗為る無双の神使雲ハ登岩の神使　山王の猿ハ幡の旅春

日の蔵赤山のくさき大鳥の風見出つる足のくくひ其神ふ住る
生動くし
つるく草後池ちるの大日の寿る孫ねさせどそ縄を張る
りるを西行つそて孫の列るくくハ行くくくくくくくくくるるの心さくくる
くくて其落ら多くくくるるを少作るにあやのお路ねのおくまるよ
坂夏の棟ふいつそや縄を引れるくハるくくおるい出られ作りを
体や為のむしるて池の堤をくくくくくくくく

あなたのみ　きくるる　蛙の声　窟雲
雲の音　五童の　塔の蓮の花　許六
きるの絵のつくりやや　山　桜　太華

日本霊異記　行基　大徳　詠歌曰
加良酒等　伊布　於保手　薮　等利　能去　等手美亭
敬木集　くまなき月のきるはまさをなるのひとかたうら
逸仙窟　あるあるくのやもめ鳥をよるべくよ時をくをおろろ
甚侍　おろふくを行ゆくを暁方いきう夢くるに鳥り
つを逃くるよ上られ盃るるいとあきるる
みーっおや鳥のかうと行るる　山川
る親　鶏を　よる　つれよ　菊齢
くつ鳥　こ　三つ四つかくはんえるう　馬明
るのくこと鳥　くろむや　虫の春　野明
逃るるをかをるるする　山鳥　今は　かをとも音は　鳴る　美恋

化多の蛭のさいきさるあは死水の垢を啜り実りて長きものは魚をさ
くり伝る五穀をためる多のまとるめしてかをやるるめは体よ伝る
るるるるーー蛭の先かねまるるるはたれっ支をやるるーきくるみよ
やいとおるるー
るるるてるるの名よあるるるるるのは鷹鳩の一名泥滑々といふ俳諧る
行るるとつるるありて声をおしまるるるるるるるるるやく涼し
かの明々とつるるはかるるニつるそめるるーー　むくて糸なとなるは米
櫨の底をやるるるんー

昔雪山ノ中ニ在共命鳥一身二頭一頭常食美菓一欲使
身得安徳一頭使生嫉妬心而作是言彼常云
何食好美菓我不曾得邪取毒菓食之二頭俱
死盍比秋迎與提婆
明々与命々与共命鳥ーー共命鳥ーるるるるるるひ
世を伝るといるるありて春秋の堺をきるるるるるるるるる

文周女

いろ〳〵の鳴声らあるゝゝて治長う事ゝ様ゝ・ものあり
一説に夜遊テ朝宮漫ヲ好鳥也其鳥ハ蕎麦白米の類饅頭ハキラヒナリ
誠よ考るものゝゝまつハ世よあるゝて又詮るゝ其形よ毎ゝ〳〵る隆鼻
鳥う常よ人の知ることゝゝ愛若高雄の山に在テ杉の木に穴居ル鳥也
迦陵頻ハ声の美よおられ孔ハ我ゝ考ひかの梅陽とつゝめよ考く
ろむう

韓子曰鳥有周々者首重而屈尾ア将飲於河
則必顛乃御羽飲
世俗の伺よ仮ゝゝうゝとつゝうゝ〳〵といふゝうゝ
まつけゝゝゝ了
佛説六種の鳥 白鵠 孔雀 鸚鵡 舎利 迦陵頻伽
共命
隆鼻鳥ハ天狗のゝゝ

百花譜

当世の人の花を愛ゝるいつゝの時ゝ花実兼備の世あゝむ
梅の風雅ゝるゝ水陸草木の中に似る物ゝあゝじ十月一陽の発ゝ
繁ゝゝる江南乃玉妃まつえめるよう生涯を物すきゝるゝゝみ風流の
目ゝみよ孤ゝる花を愛よゝゝて言ひゝる雅ゝといふつき遊見の心
おゝゝゝく考ゝ飽いき過ゝる心よう桐火の冬ぶうかゝら暖まゝる優もあく
きのふに飽ける心よう一変著ゝる衣類調ゝゝとふゝゝ目ゝゝかけ行人
に寄ゝ金ゝゝる男ゝゝ愚癡ゝゝすりぬけゝゝ出ゝゝ切和を
ゝつゝてはつんゝる男の一言よ百年の富貴をかゝう借銭の利よ利をかさ
ゝく盛ゝる過ゝる花ゝ生ゝゝ中ゝゝをとけて焦ゝる住居み朝夕の姐を立
ゝも移ゝの風流の目ゝみゝ寓めゝゝ多ゝゝゝて多ゝの毒ゝゝあゝ待ゝ
ゝゝくゝて世を移よいゝゝみ回元のかゝゝひゝゝるせる人ゝゝ似ゝ

山譜一章 草木の花を女乃上よゝゝくて評しゝゝ
行海物ゝゝ奇怪の草木を色し極て神農も考ゝの孫ゝ
本草ゝゝてゝゝるとゝゝうのゝゝゝハゝゝゝのゝゝゝるゝや

梅十一品 紅梅 早梅 消梅 古梅 綠萼梅 葉相梅 蠟梅
紅梅 杏梅 臘梅 又あるまゝ廿四品をのせゝり
墨客揮犀ゝ
紅南大庾山嶺ハ梅の名所なり嶺ゝ佛の堂あり往来の人多ゝてハ
壁ゝ題してかきつけゝる詩歌いとゝゝ紅ゝ一とせ梅皆枯て一ぢ
ゝ絶ゝゝを呉列の司あり況の任果て陶りる某人の娘多
江遠第ゝ梅の木三十ばかりゝめて植ゝり
轂俸買栽三十樹 清香留與雪中開
ゝいふ句をかきゝゝ好るの者ゝゝより年毎に梅を植て嶺も乃ゝも
梅茅えて茂りゝり
黄山谷詩 含香艶素欲傾城 山礬、是弟梅、是兄
梅四貴 稀なるを貴ミ 茂きを貴ミ 老るを貴ミ 嬾を貴ミ
瘦るを貴ミ 肥るを貴ミ 蒼を貴ミ ひくを貴ミ
本朝にハ花と称するハ梅の中古以来ゝ花と
称する物ゝ梅ゝ

英花故事ゝ草木の花よく葉ゝて人の病をいやすもの多し
槐の花ゝ葉を煎じ酒やまひをさゝ白梅花は嘔吐を止
忍冬花ハ血をやしなふ草木のゝちに性あゝて柳ゝゝはきゝ花ゝ
茂ハひゝゝ立るゝゝ造ゝゝゝてゝるゝ八重咲むゝ實なるゝゝゝゝの花
多ゝハ立ゝゝゝ立出の花六出ゝ咲めゝゝハみゝゝてのちゝ接ゝ双仁ありいち
ゝくの花連翹の花四ひゝゝ咲て實なるゝ山梔子の花のゝ六出にして七
通ありある八花の後ゝ實なるハよのつねゝゝあるハ実のゝてのちゝ花
咲あり氏夕顔爲氏の物ゝひゝゝ蓮のゝ花と実ゝ同時ゝきゝ
其立德ある中ゝあけゝゝゝ麻ゝ花ありてゝゝ女麻ゝ実ありて花
なし

梅ゝ多ゝのゝ日のゝる 正統の時 義
疫ゝ果て多ゝゝゝゝ毒の白ひゝゝ 去来
日ゝ立ゝゝ正月ゝゝ 梅の花 猿雖
梅ゝ多ハ中ゝ絶ゝ時ゝる其ゝゝき 架ト
梅の花ゝゝるゝひゝゝて白いゝ中 来山

梅 蔵て 宝正 月 のこりより　宇月

紅梅といふ花を一家彼岸系の心を動し未冥紅の光をあらためしと
やうて蒼々けい花ひらけてより日々よおとろく百風を第々日よ来けをつか
る色を失ふ毎々に三十色をくる 野良の大蹴 つるり 咲ける流
をつくるる心地をする

続宝集に 春の日者人あるを来るまて来て酒のを伯
るよ紅梅をもて梅ふをを当根のすし 志土笠をてをし伯ることて
我せこうをもふ人の花の色をそれん梅とりをを来りめる

返し

あさきをき色をきるのそれハ梅 梅をををる句ひををる

紅梅を嬢 任する 壽 ア 二つ車　杉風
紅梅のなれて 信の 赤さ小　如行
紅梅や 白い 色さら 数しまし　童平

梅を全盛の頃城を天晴当風るおをるる風俗ハ来明るををを
一点もなき花るる

梅のちるみよ連句の心ひるよるる（きるを二ツ三ツをる）
さくら三月ら　山梅　梅花　花梅

山梅ら散花のけしきを貴殿を　花梅ハ散咲交の伴
梅花を山領ら禁ら満山の花らんまんををつる
花の白化と梅の白化と混雑すをるを花の白ハ詩歌をに眺望の
風色を化ル梅の白ハ目前の春色を化ル是傳也

白雲や　花ら　のまるを　専吟
木のすをハ汁を　時方　さくらの野　義
鶯のかけ梅をやすや　鶯乃声　共角

梅を花の白よ目ら付ハ爛漫（ランマン）る白よあるを気ハ花の白ら目ひ
かるを昔ら比 年の花の中梅の白一ものをる

梅を四花の化

花春の春をを　かハる　鉄立　正秀
きのふ今人　花色ら　さくらの　無明　義

糸桜　服　一名いとしだれ　先来

花は櫻を分つ八花と櫻と一ものなるべきを互ひを分て

分つ　亜の花なるべし山の櫻と分つ

花衣　花の袖　衣類　花の姿心の花又花の春花の都なるの類又あの花

仕て四〇く仕せさるものなれハかやうの花は櫻を分つ

花の發句は梅為山吟なるとすて花の咲梅物分くるに

發句の正花を他の花は亜なるに本意はあるなる為なり花乃

賞説おのく説孔なり是を今的の説なりを用ふべし

花千句とハくるかるまし　独吟千句は発別なり大なる花

千句は四の脇り梅なり才　十の脇は為あり為の脇なり

春雨の發句はあるべし

羽織を花は為なるもむる　正秀

さくさくやさくや都は牛の角ひさく　洒堂

是利はさに紙らみなり　山櫻　心城

仕樹を塁地の分るさくさく　木因

海棠は唐の時を得る野良の大なると作れ弊ひを慶は世の中

猶この考れと質素すてくるはひおし城は香のなき一色のなる

を本意なれ

海棠は唐の時を元八海棠なる故は海棠と名つく

異名花仙唐は八海棠を以て第一とし詩人最賞説なり

句は海棠の花を満なり　秋乃月　分我

海棠のさなりなるを　花　月　其角

睡水なるといふ字を海といふ字なるは海棠と名つく

き来異なる考れとも一句はこハ是しきあれハ自句はとうめを

優艶は句なるを分なる趣句も句なるを一つなれとみちなる

扨のとくるをうつやおなるとかはして吟する時を為やなる花や

ものと立のひくるさるはなる別してたつて先達のなるなる詞は

吟心をなめしめるを今新さは新くなり

賈耽著百花譜　以海棠為花中神仙

不生不滅の心を

海棠の新を　悟を　涅槃像　其角

梨花ゝ女書の傍ゝ侍る妾の如し　ゝゝ物おもひうち考ゝ常に

人のゝよ立るゝ如し

梨ゝ山菓ゝゝゝ

八重垣山の山中に岩窟あり人毛を生ずる不絶玉道往日といへ
ども通ずるものなくあやまりて毛を生ずれば黄泉平
坂をみな社と八重垣の宮あり八千代連枝の玉椿あり是陽の
神八千代連枝の中琴しとむすぼせの山樹あり今なを存せり
樹の葉あれハそ樹のもとおのふ大神川の岸よりまさきの森木
空まで連枝とうるそるるにさきる葉すとハ木のあり
ひろうれ立て岩石のはしくそ

桃

桃を元来いやしきものとして物忌の物好風流する素色るそれ毛と
へハ下司のそれ俄に化粧一威を著かさして生ずる姿嫋々と咲みて
此るゆるる首筋小耳のあくるに産毛のなきをあるといへり

孔子家語に

孔子侍坐於魯哀公設桃梟桃哀公曰請用之仲尼先飯黍而後啖桃左右皆掩口失笑公曰黍者衆飯之主以雪桃也仲尼對曰丘知之矣黍者五穀之長也祭先王以為上盛草有六桃為下祭先王不得入於廟丘聞之君子以賤雪貴不聞以貴雪賤今以五穀之長雪果蓏之下是侵上忽下也

桃をいやしきものとするるといやしきものとするにも
拾芥抄に八種唐菓子梅枝桃子餲餬桂心枯脯鏡鑼團子

誹諧新式　正月　桃符　桃板　仙木

色々もろこしの桃の木の枝の神荼鬱壘の二神をかきて元日門に
立て凶鬼をふせくとそ

風俗通　東海度朔山在大桃樹盤屈三千里下
有鬱壘神荼以食凶鬼名曰蟠桃

黄泉ひらの坂のほとりにいるすもそるくそ
てまちもちものひしハそくそ逃げきるにいざるきの食桃のみを三つそ
にのるまくいふ事を助けしうかあ東の中ツ国るあるもるうきさ
青人草のうき世を蔭てくるむ助けてとのひて意富加牟
豆美命といふ名をのひきを
桃の凶鬼を逃るる日なりるそ日さそ

日酒よ蓋かろう　梶の葉　許六

梅よりも梶や伏見の小天神　去考

餅くはぬ殿くらすもうの花　小枝

きりのやうに光り物の光　仙流

かくもあるよ生てゐるさく細う角　本因

むつくと白ぐるるしらのもの　梶璋

さらさらや雫も蓋に水のと　小枝

つゆ浮き　蓋に　梶の花

蓋々紙心浮き花をいとるらん

草字蓋の解よ蓋の色白をのぜくうるうるはふく

山吹のきよのけるる眉目容すくれ鼻節胡とうり穂ふきれる生

つき出遠鬱る夏とつるるるうるるきて命をかけてとおるはぎるるるる

こ女のお意といふまーるる

百五十　蓋はてみいるる蓋なるなるけるおるはるるるるるきの花

ふるきやや手紙の白ゆ附　蓋

梶の葉　野水

山吹や　小枝

山吹やこるれ　流る上ハかいき　乙由

山吹やるるるるるるるるるものかけ　希因

山吹や　川の中ゆ　雪乃通　百明

山吹や蓋　かけるる　杉丸夫　抱月

山吹の花くけ　きるるるるる　去考

山吹よりも　蕊をりて　青蓋ゆ

長春薔薇の　くくひハれ白ゆつくく　紫ひるるるハ　紙れと元来いやき

花の球みさるるるきこそくくそそ　るるるるるるハ　熟嫁といつる辻居のるのく

るくを行蓋世上よ　徹徹物るるる　おゆるてよりる　高流を立てゐるるき

比丘　振袖を著ー　始めるるく　孫るるるきこそくくさられ

白氏文集　階庭　蕊四　小微　入百夏　開　春　蕊　為八木

井之謎曰　一八、五八

飛泉　仰き流　仰き流トハ　垂縄　取水而上之故曰仰き流也

一八トハ井ノ字八角也　五八トハ折テ井之字一四之則為十四十

即五八也 汝我を尋ぬる尾を一八と云ふ八氏一八井の字なるより田家の棟へ持
草を一八と云ふ水なるより火の災をよくる祝詞なり天井壁井の類也

職人尽くさと合　三十番

青の君らえらあぬさま立居のお修りの月ぬなる
夏ふるおるしやるふ書こるかせきりつどの世の月そ
左右ふに其ふふしるうち寄て勝負あるふくい
つまこふるかせきようるふあるらて給よや
あちきかやあ八立居のつくつに独あるひおまもみるう
三位門ふとやつるうるうるすー地獄り过るのこるちきと
左右八立居のやさしられる右さ位門の暁よくるう
狂心右馬際

牡丹を寵愛時を過る妾の天下にそうるる心るけるれふう嫉妬家歌
のいふふふて青天を向て吐息をつきる風情を作る
荔枝に非名花一牡丹に無二日賞一
牡丹の名うて牡丹るあるさるハ是牡丹ら牛る

唐ふふ歌きて尽くる牡丹ふう移　許六
花石の名のやや牡丹の花の影　杏我
牡丹花ら牛るるやの月　許六
つめふくも妾のきせる潤住外　支考
をつ雪る吉筆う系の妾外　兵角

牡丹花名青楊子夢庵
青柳泉石堺る逸一付牛るまかり行く自ら謂て云主君をもとめ
んと歌するものあふ八則我をとむてとるうず人もて狂者ふ後
に記粉盆基ふつ者あり生逐て和まに主君を養ふ事青柳諸彩
ふて正住す逐る古今集の秘古を授くそを堺傳受ふ
芍薬とつ花らいまく嫁せさる娘のよひも二八るあまりるう移る
けぬえる心地をする

芍薬るか　芍薬にふ　芍薬や　巴静
ふき十薬の茂ふ外　尚白
砌次をひふけ八夏のも　支考

芭子ら眉目かたちすぐれ髪もく常ら西施ら鏡を恥て粧ふ姿ら
浅世ろうの子八義年心をかけぬ分乃一念のうらみうらてこそと利益
して尼こそうらうらこそ所つうらうらさうれ

けしの花のうらうきも風をまくで義果て侍るいふけし坊主とへる
芭子ら文章のうらうらとこそと利益る尼とこそ利益る文章の上のうつま

むらう百乃義の名残やけし　扇　許六
一節の細乃くくし　扇の芭子
押合ぬ先に義ろうけしの花　舎羅
咲たやと作ふく芭子乃つうみ　野径
けし細や皮ろうくと花ひくく　東岱
ひらう義や十年年けしの花　百明
四念入芭子ら義らのうくくうう　而得
須臾ら初ち今ふ芭子の蒼ろう　紹月
百兄者
義時の心あくくう　けしのむ　越人

厚常の詞うつて中七ろう風ら風ら　けしの花　其角
むの義のうくせうう花を立ろう八義今織人筆うう
うくせうう西ふ風もくのうう別うくおせある故一百のうくう
うんうひくて兄を断するハあ尼山花の義うくちうう
らやむ兄義のあうるうおるうのちうう
杜鵑のぶうき花やうう女の義うて初を考ふ
かううはう咲や組屋乃うさう水　許六
八つはしを律ふるはや　牡丹
杜鵑乃外八伊勢う　麦を蒔
かううう仏うう水の影　義
ふくの茅の　傍ら　かうう　去来
あやめうう兄の目を義る山地をする
あやめううう義の眉の上　岩雪
きうう他の水ろうあやめうう　分我

[illegible]神のあやめの白い　紅色
あをめ苔　百明
角差て牛の手のひらあやめ草　一境

寛文七年五月五日　あやめ角
浩南吉祥院村乃田の樹あり主人是を牛神といふ牛
のうのあるいつも今日村中牛を飼ふ人あやめを牛の頭の上へ
そなへ是をあやめ角といふ牛をいてけるに素り林をめぐる事三
めぐりて稼を推ふく者て三度をくまれ八年中牛よ病
とうとし

同日　菖蒲山桃　五月五日　武藏人より献之　あやめを一瓦盆に
植過しくまけてとなにあやめてくり常の枕のかきものに

永き根を花の枝よ分るまりるやまちのひおりるらん　俊頼
今日又あやめを葺てむすふ日かな　藤の葉の柏乃

百合花八数弟多し　世より博多る合鬼乃色を美る事元来
一種すて生得いやき花なりたるを興車よりある位なりれはあ

えをつくかけあけ上きつる胆（キモ）をくあゆみ出る女の姿
姫乃八十二三をうるる姫のひろる音ふるくをむすひるるあ

あふむくるをむる淋しる合の花　ま考
百合の花ひらのあちら向とうる
えよりとハかきうるのとや　る合のを　素園
ありのをあらるをるるをむきあ　其角

合歓の花の移ふけるるハ徐園の中ま絶物をかえ盆移ふる女の姿
うるるをすおあるるるあてかくハ移ふるんいを智つる

屋敷乃解　得巴今

あるを移まといふ木あり花ま移ふ花ある我をの手ひる碁
ををの〜みてうるうとおあとあるへハおるるくしき剪（イレ）かおるるとつふ
あるをああるあるあるをひハおるを接めをいふ人のまのけ也されか
盧生乃枕の栄耀を之壮周乃机の過逸を笑ふ人の世の栄
なれハさめて理屈をいつくよるとおてあるるちを極楽をさん
まして病ふれのをむををるるを豆をして来乃おのを枕

をかこち勢色乃秋を志きんよりハ時節を来の酒きりんなさるひ
ゑまてもよみなるしとろろと入くんろる観念のはめとやヤ
さんを器

其下ゑ盆顔の目をさまるくるハ世ゑ迷き法まて男を志ぬ女のそめて志仕
に生るころのろ川つきるきあるきあるんう
業楊花ら色白ゑ肥ゑろるっ迷くよりて乃ハ白病瘡のあ〜すきゑ
ゑるて無さめてやくゑ

あちさゑ乃や　三ゑ〜西る　山つき　野梅

蓮らろ〜〜きゑすくゑ〜ゑ〜ゑ〜ら上ゑの絵ゑかける天人の顔ら
ひ〜〜こやら佛めきて心てそおこるれ

周濂溪先生愛蓮為花中君子言蓮如君子清

芳稗美也

其袋

母を養ふて

蓮の実をふくむゑ乳房ゑ　風洗

れ風を水へ通ゑ蓮　うる　百姿

蓮の和名抄ニ其實ハ蓮とあるゑくくと実の名也はちすといふ
ゑ惜度ゑ似て實の名ゑ
本草藕一名水芝荷ハ芙蓉也其根藕蓮ノハヒ蓮ハ莖ノ
下ノ白蒻也

蓮茎のそひまそ人ら おすちんよゑ出ゑの中ゑおひて
卯の花ら才一名見よ〜附ゑの本へきころハ必ハ咲とおゑくるこをかし
りゑ〜ゑ末の花とつゑ人ら毛下乃平也卯の花月夜の夕すみゑちろめ
ゑる衣裝ゑ過き芋仕すくゑる女のゑとおつゑるっ行遠ふるゑる
く立別さて顔のゑくゑおゑつゑくゑ世ゑそや屈鄙ゑりそえお
ゑ〜ゑる心地をする行方へっかよゑんといとなつ〜

卯のもひやひらちやらの　冬　拂　許亡

うのもの　卯の附ゑのくゑう〜ゑ

卯乃花や　ちいさきゑの　四ゑ〜ゑ〜　雲鬢

平のもひや　ゑ　ゑ　乃　兒あゑ　曉牛

朝顔の盛すくゑきハよき女乃常ら病のちよ寿ゑ土用八寿

かくるゝ〜障るきに折ふし一月の日数を少日をかゝけ引延るゝ
ゆゑ〜空晴きり朝日さし出るに心地よけれ共荘ひ衣裳ゝとあるゝ
ゝそ不のめきゆるゝ似ゝ

和泉堺に宗椿とて茶書のあるしゝ浮民物語をゝつゝる二十四
部目朝夕の尾まて筆おゝ〜空〜ゝる牡丹花皆栖かゝ
ゝ心をあゝれみゝ

筆ゝゝみ心よかけしちきゝよや打しゝ清朝の霜

草庵集　憚のゝぬけゝるを朝夕の花ゝつけゝる

　　左大納言干時お將ゝ作ゝ

空堺乃世のゝゝゝゝをゝゝゝゝ八狂あゝゝゝゝ朝の花

返〜

ゝゝゝゝのむゝきかゝゝ試ゝ清て踊ゝき朝夕の霜

朝顔乃戯かゝて咲ゝゝ　素川

朝夕や　七枝の伽乃別ゝ附　足栖

鶏ゝゝ和ゝゝき花ゝゝよゝゝぬ女の一節ゝ貞女をゝゝゝ

蘭の花ゝ蝶の羽ゝ薫すと先仰の賜ゝゝかゝ出ゝ作ゝゝゝ其住
人の面影ゝゝゝゝれゝゝれゝ先をこゝゝゝゝを宝ていえゝ

みさゝし記行　其日のかゝゝゝゝある茶店ゝ立ゝゝゝゝ

きゝハ彼也女の蓁くゝ[illegible]に似ゝ

さゝ姫のるゝもかうしゝ[illegible]絲も　史邦

女郎花らいめゝくゝより女よ母とく我蔭よきと法師の彼戒さよめるゝ

女郎の二字にるつめるゝんゝたつ秋の恨よゝめき立ゝる菊よ先ハ

かけられゝくゝんゝす柄やすくゝみゝうんゝとあゝる物すきゝゝやさゝりれハ

女郎花といゝる物花すゝてハちゝとゝけゝゝかゝて色くゝら声のゝうくゝきを

ゝゝみてふゝを習ハせ髪をおゝろゝて色を比丘尼とハいゝるゝおゝ

むゝゝ女色ゝてかゝゝるゝハ大象をつゝるゝつゝまきゝるゝ[illegible]ゝて

男色のかゝゝまりゝる類ゝもあゝで男女の中ゝ立る風俗也此花百種よ

類する蔭ゝゝ[illegible]人蓮葉のゝゝしとゝゝる八草實のゝゝひよ比すゝ[illegible]ゝ堂も

花もひゝくゝ芙ゝて下ゝすゝるゝよゝゝめきゝゝる八彼比丘尼のゝゝひとゝや見む

ゝゝめてゝおゝるゝはゝゝも女ゝむゝゝゝよきゝくゝよゝかゝゝゝ

白見

菜苟や斗ゝより　ゝゝてゝゝゝゝゝ　春澄

斗よゝる俊ゝ　ゝゝゝゝ　めゝゝも　其角

遍照ゝるゝを[illegible]ゝて嵯峨地の草のゝゝよ立ゝゝる京流布の一句

ゝゝゝ女とゝゝふ字入所着ゝゝゝゝゝゝや所ゝよ諍を立ゝゝゝ

何ゝゝゝ京田舎の俳ゝゝて花の名ハかゝゝゝゝよゝめゝゝゝゝゝと

ゝゝゝゝかゝゝゝゝゝゝ

文粹　詠女郎花詩　源順

花色如蒸栗俗呼為女郎聞名戲欲契偕老

恐ハ惡衰公羽ノ首似霜

ひよゝゝくゝと粉雪けゝやめゝも　義

女郎花　ゝゝとゝゝゝる地のゝめり　呂丸

ゝを刷よゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝ花　秋色

ゝゝの上をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花桔梗　ひとちりてふきんに　飯声
秋霧の花すきとる　桔梗ト　柳梅
細工ものぬ　桔梗のつゆみうち　隨友

萩ちやさきき花也さしてまよとりて生すきぶれど萩といへる名目よりて人の心をこうゝ作るなくゝ地下の世のよくゝ見よむとゆつるつるなくゝさまハ似ゝ

草庵集　右系女史光吉卿に仕奉る作ゝ

春のゝの花とや人のとハさらん萩の錦を来てゝ見よゝ

秋萩の花のにしきよりん庭のさくらのおもかげ

萩の露系つく葛の　蘭　の邪　萩
伏屋のやゝ小萩よりもゝ　麻の角　吉来
草苅よりもれの重いう萩の露　雪田
山萩乃添井ゝ　去るゝ　言水
ゝ露ゝ萩ゝ　萩ゝ　萩

菊乃隠逸ゝ八和漢ゝに名ゝ立ゝ花ゝ也ゝ八ゝ古ゝ人ゝ也ゝ
風流物好目立ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
に　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

雪菊の霜をいとき雪をかつけるゆゑ忠花と精者をつくりなる天地造化の行ふ所ぎるあらすと感せりとなへ幾孫の果のそこに三田今は富山を園をいつる西くるおるひらけ風流のある心地をする

三田今は富山を園ゆ

雪菊の傳も　ありやいけ大根　詩六
雪菊や　る万石も　雪乃底　丶
雪きくハ雪を巻て　咲るなり　乙由
かんきくや　汁の細も　一束　百明

名牡丹のちやれるたくハ大体伏見なし分内せあきあの拙女所工商の家居形をうくおうれいる地の娘も傾国乃風俗をあらい養又入生方魂の里かつるちやれをつくしひさすく拙女の立振舞ゆ作れハ新いつはりなりと刹しつむ時と所をたゝきたゝき大きなるいきなるん

事文類集ニ　齋の忠つ人他国する時牡丹一茎をあくへて我為生にて不成あハ此花枝をん高原数年を経て幸中ゆ立りしる牡丹

雪菊を

名牡丹定かくるき　蹙　う野　尺草
此幸さ牡丹の花乃去　解　東来
是ゆ多ゆりあるらう名牡丹　愛花

百くさハ重つむ雪を涼見草九章ゆ　涼草　元政

當世の人乃花を色人の實を色る嗚呼いつれの時の花實兼備の世あるん或閑ニ　當時の人情の花ようつるあるこゝ心を弱うやすきいちくく此文章ようきてくしめて人の耳目を動し作る今先生の歌くあの俗語乃實ハいるるをついつゆあるんおくつるうるをやくくんを明をいこの大通ゆ俗入さきゆ者てこつ夫實のかくちをいくん荔子の顔のぶつくくしる實性の人乃艷たようくくも暑き題の歌ようんとおるつてやくけすにちよるく姫氏の丸顔ちさんちゆ風俗の伊あつ瓢の青さあるる燕梯のあの
ち顔下戸上戸ちなくて今梅ち花ちとくくはゆけの梨のおやんる
坐ひのあくまくそ俗俗の實ゆ貴ゆ為ゆ作る
さんちやハ拙女ゆるん大天神小天神さんちやをいくるう

許六ノ自画自賛百花譜のくつゝ其巻末の一枝吳田あり又文中いさゝの吳田らあれとあゝ文意ら同し左よあゝ自賛の写し

なり

當世の人の花すき古人の實る色ゝハ〻いつれの時の花實兼備乃代

あゝむ孟ニ實の姿ゝるとゝて金霊子のふつゝるみきひ額

の髪ゝめより苦ゝく姫瓜の花顔ら山茶花の伴あり瓢乃

青さめゝゝ熟柿のあゝ顔ト戸上ゝのゝゝる苦く近年

ゝ稲んかいやゝゝといふ顔ら生ツ花かり石ゝ花ゝて赤ゝ頭を

ゝるゝのゝゝん旱の梨のゝやゝふゝる庄内のあゝゝゝおゝ瓜

吳田をあゝ印の花のゝゝ　ゝゝのゝゝと写ゝゝ大きゝ多下地

葉の花のゝゝ　ある人の鵬あり　めゝむのゝゝ　かゝゝゝふゝハと

て高ら風情あり　大魚をつゝくとゝゝゝ男めのゆゝ高風俗

なりとゝゝる近眺文なり

山水ノ譜

許六

凡山水を画くに法あり一丈の山ゝハ一尺の樹一寸ゝるハ豆ゝとの人

ゝゝて遠くゝハ目鼻をかゝ遠樹ゝゝ枝ゝ遠水波ゝゝて雲と

ひゝゝかゝゝて岩ゝ三面を見せて道ゝゝゝ二ツの岐あゝゝゝて画ゝ遠近

を部をゝて第一とゝ遠山近き山とつゝゝゝゝゝ遠水近きあとまゝ

林木遠きゝのハ疎近きハゝる密なゝ中系あゝゝのハ枝やゝゝ

まゝゝゝのハ硬ゝ土ゝ生する所ゝ古ゝ石ゝ生するものハ曲ゝ古木ハ

ふゝ多ゝてまハ死をゝて四時の変化をあゝゝ山の織除をゝる山谷

樹沛ゝ多ゝハ寺観楼閣の屋根をかゝ水郷山店のゝゝハ酒簾の青

白をひゝゝゝて是王摩詰ゝ山水の賦の法式なゝて

ゝゝゝ

夫山水天地万物ゝ始盡人胸筋助也画ニ先岩木為ニ専一山

石多作ニ磬頭ニ又為ニ凌面ニ大斧小斧ノ文理雨点皴ノ法有ニ木

樫枝挺幹屈節皺皮細裂多瑞ニ分数万状ニ陰陽向背筍條

尤嬾ニ或古松亜枝畏木ノ平圓遠者疎平水湯々而若結

爲鷺傳恕浪流曲折以至輕波細瀾蒼浪使人有浩然江湖
思山無雲若無春花山無氣無神無神則不高人家間氣
人煙也雪中無人烟是法若能辨則知山水之彷彿也
画をなるるるる先る豪豪とんのちる清濁を弄びすして山水のかきたる
もろくろ画をなるに一途ありてとくくびる古人の余意者たあり
第一法曰丈山尺樹寸馬豆人第二法曰遠人無目三四五法曰
遠樹無枝緑夏而黒遠山無皺隠々而如眉高雲ト齊
六七法曰山腰雲塞石壁泉塞八九法曰樓閣樹塞道路人
塞十十法曰石着三面路着両岐大斧小斧ノ筆法石ニ有下畧
第五節　山水訣
陰陽かまるおよるおのおのるる草木のくくすまい霧のまあるる又へ霜の
むすのるる鈍ゆるるるみおるむきいあれとかひるる山のそびえるる
雪のするる時の雪に消てみるるひくけきびしくくるるるのるきい
めるかけるさ入るる画のるるちいんかるるきおるくいむかるるんにあ
の伺るといひ人をるるやるる山を十五重ゑくあるといひ伺てる

やまと山水をそかるるれとる城ある所ゑ天守を登るる神社ある
地るる屋をさへる山石水木るるに知るるるに接る白めるる和き松る
みるるるて是其和漢各別の沿沸るるる富士る紹介もるる景たるる
かくくる松樹るあるくくゆゆる景すあるるるるるる影深る景をおしてあ
きゑ九世戸る景等るるるるるる

はして西のきるを考へて西のきるを考へて西のきるを考へ人の西のきるあんや

詩ハ成無色畫一画出無聲詩一

洪覺範石門文字禪　卷八

宋史作八境絶紗一謂之無声句一演上人戲余曰道人能作無聲畫一乎因各賦一首一謂湘八境一

茂日記

卯月十八日許六亭ニ奇家物かたりの序よりつゝ画かきて色紙あまたとゝ知しぬるに人々の筆にて其人の発句ハ芭蕉翁の四季の句をおのゝ書かつゝ梨の花の白妙に咲て其かけに唐めきたる人の影のかゝりて皆むきに寄たる画の作りそゝ考へ出るく

るの年すゆめて宅しなしの花

年作りそるゆめ世ゆと思るゆ是ハ此るのかめきて詩を作りとるゆる眼を塗て作修をさとり作修を以て画をそゝしゆるゆんをつゝるゆ此さるいゝきるハ塗よつて

なきゝ思るゆんとゝそゝらやゝ

されハ人のゆをすんゆるゝやゝ去年のゆ阿叟の梅花坊に

おゝゆ時くゝゆるて物語作るゆ考へ集つゝるハ作りゝ乃相

史橋ゆ仙せて作りんゆゝは

梅ゝゆるのつとゆるゆ作ゆ　義

ほまくさゝ小ゆきゝ上の鶯の鵬

梅ゝゆて集きゆる一ゝ小ゆきゝ鶯の鵬ゝ弱ゆる中

を一作の数意と註ゝ此まゝ中ゝれハ阿叟ゝゝ中

まゝゆゝ其ゝ大ゆの末部亭ゆ梅ひて

ひやゝくと翌をふまて曇ゆ

作ゆゝいゝに中作んと中ゝれゝを先も以弱ゆゝて薬ゝ此ゝ

梅屋の鈎ゆゝるとゆるゆゝきゝゆゝおゆふへきゝゆゝおゆも辰ゆ

くゆゝんと中作ハ此謎いゝゆ考ゆゝゝ作ゝゝ第ひてのゝ果

めゆゝゝ

画を成すに水墨を分ゝ筆意を得ゝて得形を写ゝゝ

此画法は一筆墨法を以て画を学ぶの初心の筆水墨の濃淡を兼ね
形をあらはし筆意を得るは故に画一向に拙くして作る画法の法
を兼ねたれいまの成就しかくして謝諾を其妙く初心のくく
古法を離れ自分自発自ずからに自由を作るのあるべし
十七言のいひ下せるを点のみにあらずして点のみにあらずして謝諾
の古法を考へて自由の他意あるべしを他道なくくく
一生を終るの益なるべし画法も他諾なるひを因るの偏と
なるべし

除のちるべしつて

八方義持公此殿主の画を見て故に時く是を模写の
一日此の志をいたしめの為あるべし則造せしめんとの
明此いたらく賤貨もとのみの官爵なるべし一衣
一鉢我多を除て諸事東福寺の伽藍を修して接樹を
植るるを以て法世のいたる精舎を建て拡廓の地とせんと
是を欲する為に除て命を奉りて是を代へん義持公

大きに感じのひとつなる仏して是を伐らしむ今の寺中橋
の傍明此八吉山と号し法孫の人也東福寺の大道の者
とるるお年より画を好む大道をと是をいまし師の約を
絶んと欲する絶の多き所て明此いたらく孔道法を拾らく
ものの八破履を今の画を以て大道を拾らる是をもて破草
鞋の号あり一日をもく大道師の出るをとかひて不動の係を
思ひ作忽ち寺を降る此おとろきて是を勝下るかまは画乃
中より火焔おこり出るべし八方あるべしあるいは去るべしもと
神を伏して是をいまし師
な朝文鏡　橋を伏
世をつて橋山伏を彦根五老井を絵銭別あて橋の本数を
笠の張立より其乃を人をなつくるべし
夕立ち画をかく風の姿　の形　戦人
菊咲く　陸　まて　おく　陰の奥　四　嵐雪
狂　祭　金　陰の奥を出る　稲荷山　許六

笠よ蓑かつく女や　追分踊
ひたくまて踊をかけとせもる
是ゆゑ蓑とゝを画賛す

月よ花よ細工貧乏　くとうゝ
画賛

唐獅子の血をすて牡丹　李由
画菊

菊ゑく　蒼らのちるかもろ　其角

風俗文選大註解巻之三終

薙甘蔵板

書肆

京都　三條通舛屋町
大坂　心齋橋通博労町
江戸　彦根上町
同　白壁町

東都　日本橋通壹丁目
同　貳丁目
芝神明前
日本橋通貳丁目
本石町十軒店
浅草茅町貳丁目
芝神明前
大傳馬町貳丁目
横山町三丁目
同　壹丁目
馬喰町貳丁目

出雲寺文治郎
河内屋茂兵衛
小川九兵衛
本屋太兵衛
須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
岡田屋嘉七
小林新兵衛
英大助
須原屋伊八
和泉屋市兵衛
丁子屋平兵衛
和泉屋金右衛門
出雲寺萬治郎
西村屋與八